

柴田藤兵衛家の蔵内陶磁器資料

— 地域社会の近世考古学として —

Ceramic materials store house of SHIBATA TOUBEI family

— Nearly morden archeology in rural community —

高 橋 拓

TAKAHASHI, Hiraku

キーワード：陶磁器、近世考古学、蔵、木箱

Key words : Pottery, Archeology at the early morden age, Store house, a wooden chest

1 はじめに

柴田家は「藤兵衛」の屋号をもち、近世に村役人を勤めたことが伝わる家で、山形県山形市、旧陣場村¹に所在する。

陣場は山形市の北西部に所在し、江戸時代には山形城下から月山を経て、鶴岡・酒田へと向かう街道の通過点であった。集落内を縦断する街道には古い家屋が軒を連ね、平成20年に国の登録文化財となった「田中家住宅」をはじめ²、その多くは戦前からの居宅と蔵、門塀を残し、往時の風情を伝えている。

柴田家では昭和46(1971)年頃、近世以来の古い家屋を解体して新居を建築したが、その際取り外した棟札が伝わっており³、旧家屋は天明3(1783)年に建築されたことがわかっている。

同地には、少なくとも明治15(1882)年には築造されていた蔵が併設しており⁴、昭和期には座敷蔵として使用されながら、多数の伝世家財を収納する施設としても機能してきた。

2011年3月11日「東日本大震災」がおきた。

多数の人的被害があった太平洋側に比べ

ば、日本海側に位置する山形県の被害は微細だったが、古民家が倒壊するなど、建築物への被害は少なからずあった。特に老朽化が進んだ古い蔵が傾き、土壁が崩落する様子があちこちでみられた。

柴田家の蔵の壁にもクラックが入った。御当主の柴田功氏はこの状況を危険視し、蔵を取り壊すことを考えられた⁵。

蔵の収蔵物には古文書が多数含まれ、柴田家の私有財産であると同時に、歴史的資料という側面をもっていた。

功氏は、この資料的価値を重要視し、古文書を中心とした資料群を半恒久的に収納でき、有効に利用することができる機関への寄贈を決められ、上記のような問題を山形大学文学部の岩田浩太郎教授へ相談された。

岩田浩太郎教授はこの古文書群の寄贈を受け入れ、寄贈先は山形大学文学部岩田浩太郎研究室となった。

著者は、この寄贈資料の収納調査に参加する機会に恵まれ、この際、当家が蔵に所蔵していた陶磁器群を拝見させていただくことが

できた。

著者が研究領域としている近世考古学・近世～近代陶磁器研究の視点に立てば、これらの陶磁器群は、有効なデータを有する資料として認識できた。

このような考古学的な視点から、著者は古文書を中心とした寄贈資料の収納調査とは別個の調査として、後日柴田家を訪問し、柴田家の蔵に納められていた陶磁器資料に対して実測と写真撮影による記録調査を行わせていただいた。

本稿ではその成果を報告し、調査の結果得られたデータをもとに、山形県村山地方における村役人層の陶磁器受容の傾向、近世考古学における蔵資料の有効性について検討・提起したいと考える。

2 近世考古学における陶磁器研究

日本近世考古学は、1969年の日本考古学協会第35回総会において、ようやく考古学の一領域として確立した歴史の浅い分野である⁶。

その研究は、都市化によって埋蔵した近世遺跡が広がる江戸や大阪といった大都市を中心に展開し、その中でも陶磁器研究は大きなシェアを占める研究分野となった。

発掘調査によって多量の陶磁器片が採集できることに加え、それらに多数含まれる「肥前陶磁器」の産地における編年研究が大橋康二氏によって進められ⁷、遺物の産地・年代の同定が可能になった点が、大きな牽引力となったのである。

江戸遺跡を中心に出土する陶片の内、産地同定が可能な資料は、ほかにも瀬戸美濃や堺・備前等があった。このようなデータをもとに、出土する陶磁器の産地・器種の同定を行い、

その割合や点数から消費・流通に言及する研究手法が確立していった。

大都市遺跡で確立したこの手法は、地方史研究にも導入された。地域社会の近世遺跡の多くは、基本的に埋蔵文化財体制において発掘対象とはされなかった⁸。しかし産地同定の手法は、例外的に発掘される城郭関連遺跡の調査に利用され、全国的な近世陶磁器研究も、産地同定による分類と、その分析から流通に言及する方法が主流となっていった⁹。

このような研究手法は、地道な産地研究の成果によって成立するが、陶磁器資料に対する産地同定の慣習化は「陶磁器は資料特性として産地を確定することが可能である」という幻想を生み、同定を担保するような産地研究の存在なしに、伝世品や消費地遺跡の出土資料、推定に基づいた同定を積極的に進める研究を生み出す、そんな問題を孕んでいた。

またこのような陶磁器研究では、城・武家屋敷・町屋・村落といった資料の出土地点の属性から、そこに集住する身分的階層を明らかにし、その受容層に迫るという試みも可能であるが¹⁰、当然、同階層内における多様性が存在し、発掘地点の居住者についての明確な情報がなければ、実証的な研究には成り難い。

このような状態は、近世陶磁器研究のある飽和点を示しているように感じる。

消費地遺跡から出土する多様な陶片について、市場動向や生産過程によって左右される形態・胎土といった特性から、積極的に単一の生産地を選択し、消費地と産地を直線で結ぶ手法で、文字資料が溢れる時代の流通像の復元を続けることは適切だろうか。

消費地遺跡から出土する陶片の大半は、使用者・収蔵者から切り離された資料であり、

それらの所属を復元することはできないのではないか。

出土資料単独の検討によって、このような限界からの脱却は可能なのだろうか。近世陶磁器の研究には、このような出土資料に欠けている情報を補うため、新たな資料を導入する試みが必要なのではないか。

3 近世考古学における蔵内資料

この情報の欠損は、出土資料が「廃棄物」に偏るという特性に由来すると考える。

陶磁器の流通や受容の解明を目的に、このような欠点を補おうとするならば、まず、有効な方法として「古文書」の導入が考えられる。

物品の購入記録や家財を書き上げたような帳面と、その帳面を記した家の情報・履歴が明らかであれば、陶磁器の流通・消費研究において有効なデータとなる。

このような代表的史料としては「関口日記」¹¹が広く知られているが、類似した近世文書は各地に多数ありながら、周知されてこなかった可能性が高い。考古学的な興味をひく、特定の製品の形・模様・産地に関するような記載は、文献史学においては議論の対象にはなりにくく、見過ごされることが想定されるからだ。

さらにこのような古文書についても、記載内容と物資料を対応させる難しさが、「相互が補い合う資料」であるためには、古文書に詳細な記載内容が求められることになる。

本稿で扱う蔵に収蔵されてきた陶磁器資料は、このような発掘資料と古文書、両者に欠けている情報を補う可能性を有していると考ええる。

出土資料が廃棄物に偏るのに対して、蔵資

料は廃棄されず伝世した製品として位置付けられ、古文書が不在であったとしても、その使用者・収蔵者について、イエ単位ではあるが確実な情報を有する。

また本例を実例として示すことはできないが、前述したような古文書と物資料を対応させる難点も、同じ蔵の収蔵物であれば、記載内容と製品の同定が可能となるだろう。

蔵資料はこのように、出土資料の欠点を補う特性をもっている。

ただし蔵資料は、考古学的に大きな欠点を有している。

蔵資料には墨書のような文字記録を除けば、絶対・相対ともに自立的に年代を決定し得る情報がないという点。さらに蔵には常に物品の入れ替えが行われる流動性があるため、その収蔵物の生産・受容の変遷が無秩序となり把握できない点である。

このような欠点から、蔵資料を考古学の領域であつかうべきではない、と考える考古研究者は多いと思う。層位や共伴関係を明確化できる発掘資料を至上とするならば、蔵資料は考古学において低質な資料と位置づけられるからだ。

しかし、なにも著者は蔵資料が単独で考古資料として成立すると主張するわけではない。

蔵資料は、遺跡から出土した資料や古文書と相互補完することによって、より詳細な物資料の消費像を復元できると提起したいのである。

今後、蔵資料を出土資料・文献史料と複合的に利用する手法を確立し、前述した各資料の欠点と長所を研究者が理解した上で利用できるのであれば、蔵資料を利用した研究は発掘資料に一元的に頼った手法より、実証的研

究を可能にすると考えられる。

4 柴田家陶磁器資料の調査について

前章のような理解から、本章では柴田家の蔵に収蔵されていた陶磁器資料を報告する。

報告データは、2011年の9月～10月にかけ、実測と写真撮影によって作成したものである。

調査においては可能な限り資料を選択せず、網羅的に行った。これは前述したように、蔵資料は流動的であるため、この欠点を最低限自立的に補うためには、①陶磁器同士のコンテキストを重要視し、時期や器種による製品のまとまりを検出する、②そこから例外的なものをはじき出す、③逆にまとまりを構成する製品を明らかにする、といった方法が分析に有効になると想定したからである。

このような点において、本調査は同じ蔵資料を主な対象とする「紀年名資料」の調査とは発想が異なる¹²。編年のカギとなるような年号がわかる箱書や墨書がある資料を選択的に調査するのではなく、蔵という同一「遺跡」の「遺物」を総合的に調査し、その製品傾向に注目するという考え方である。

ただし、箱書等の文字記録が重要な情報を有している点を否定するわけではない。

柴田家の陶磁器の多くは木箱に収納されており、木箱には年号や内容物に関した箱書が見られる。これらは柴田家における陶磁器の受容年代や、箱と陶磁器とのコンテキストについて、説得力ある推定が可能な唯一の情報である。よって本稿では、箱資料に対しても写真記録と採寸による報告を行う。

また柴田功氏からの聴き取りと簡易な観察によって、本資料に次のような特徴があることが把握できる。

①先代の御当主である柴田武彦氏が、蔵の収蔵物に対して整理を行った時期がある。

②その際、陶磁器の一部は箱が入れ替えられ、箱と陶磁器の元来の組合せが分からなくなっている。

③同一の箱に収納されている資料は、同製品でまとめられている。

④蔵には複数の空箱があり、箱書から、それがもともと陶磁器を収納した箱であることがわかる。ここから、分解された陶磁器と箱の組合せを、部分的に復元することが可能である。

箱と陶磁器の収納関係が全面的に保持されていない点において、本資料は決して理想的な蔵内陶磁器資料ではない。しかし、これは各地に所在する蔵資料の現実的状态であるともいえる。

本資料の報告は、このような現実的な蔵資料から得られるデータを具体的に提示できるものになると考えている。

5 柴田家陶磁器資料の報告

陶磁器資料の報告は、器種による分類順に進めるが、当報告から柴田家の陶磁器受容の実態を検討するためには、各資料の生産年代を一程度推定しておく必要がある。

本資料は染付が施される磁器製品が主体となる。近世に九州北部で生産した「肥前磁器」以外で、考古学的に明確な時期推定が可能な磁器の基準資料は現在のところはない。特に近世末から近代の磁器製品については、全国・地方ともに広く認められるような編年研究を認めることは難しい¹³。

このような研究状況から、本稿では近世資料については大橋康二氏の肥前陶磁器研究¹⁴に従って年代推定を行い、近代以降の資料に

については、染付に使用する呉須の色彩や、施文の技術など、明確な生産技術の消長を参考として、次のような分類を行う。

A群 肥前陶磁器研究を参考に、時期推定が可能な近世資料。

B群 天然呉須を使用しているとみられるが、年代が明らかではない近世・近代資料。

C群 明治初年に肥前に導入され、明治12～13年頃には東北の諸窯においても導入された酸化コバルトに類する顔料を染付けに使用している近代資料¹⁵。

D群 染付けの手法として、型紙・銅版転写による「印判」が採用された近代資料。

E群 黒色の染付け、科学的な緑色やピンクといった色彩によって文様が描かれる近代資料。

F群 陶器資料。

このような基準によって、柴田家の陶磁器資料を分類し、実測図を提示する。本文中では、図番・分類基準・器種・点数・可能な資料に限って生産時期を順次報告する。

実測図は全て1/4で表記する。基本的に染付・上絵等の装飾は図化せず、写真画像を併載した。

ただし、釉薬・胎土の色については図面上に表記した。特に釉薬は陶磁器研究に際して多様な見方ができることから、非カラー図面による資料の理解を助けるために、単純な色彩情報を書き加えた。これは三属性（色相・明度・彩度）による表示と共に、括弧内に慣用色名を表示している。尚学図書編『色の手帖』（小学館、1986年7月）を基準として視認した。

釉薬が施されない部分で、胎土観察が可能な資料については、胎土の色調を書き込んだ。

胎土の色調については、磁器製品は同じく

『色の手帖』、陶器製品は、小山正忠・竹原秀雄編著『標準土色帳』（日本色研事業株式会社、1967年）を基準に視認している。

箱資料については、実測図は作成せず、写真画像のみを提示した。形態から5分類している。

A群 板同士を面で合わせ、釘で固定する底が平面を呈する箱。

B群 板同士を面で合わせ、釘で固定する底が袴状を呈する箱。

C群 四方、ないしは部分的に格子組で組み合わせ、底が袴状を呈する箱。取手無し。

D群 四方を格子組で組み合わせ、底が平面を呈する箱。金属の取手が伴う。

E群 コンパネやベニヤ板等の近代的な加工材を材料に含む箱。

画像は可能な限り1/8に近づけて表示し、縦・横・奥行の寸法をmm単位で記入した。

5 - a 陶磁器資料

図1-1 A-大皿 1点 1650～1670年代頃

芙蓉手の染付。中位に稜線をもち、口縁がわずかに外反する。畳付無釉、少量の砂粒が癒着。底面にハリ跡が3箇所。底面に渦福の染付。肥前産。

図1-2 A-中皿 10点

内面に菊水文の染付。高台内にハリ跡が三ヶ所。畳付のみ無釉。非透明釉。肥前産カ。

図1-3 B-中皿 21点

見込みに麒麟文。外面宝文。口縁部は輪花。麒麟文は鉢や小皿にもみられるが、本品だけ精密。底面に口に「富」の染付。畳付無釉。

図2-4 B-中皿 1点

楼閣山水文。輪花。畳付無釉。高台内にハリ跡が二ヶ所。

図2-5 B-中皿 5点

簡易化された山水文と宝文。輪花。疊付無釉。

図2-6 B-中皿 1点

楼閣山水文と宝文。輪花。疊付無釉。高台内にハリの目跡四ヶ所。

図2-7 B-中皿 21点

帆掛船を伴う山水文。疊付無釉。高台内口に寿の染付。

図2-8 D-中皿 1点 明治期

見込み松竹梅文。その周囲に牡丹文。外面唐草。内面は印判染付。高台内にハリ跡が三ヶ所。疊付無釉。

図2-9 D-中皿 1点 1880~1910年頃
いわゆる「いげ皿」¹⁶。口縁部輪花形状に鉄釉を施す。内面扇文。銅版転写の印判染付。疊付無釉。

図3-10 A-小皿 1点

錦手。朱・金色の上絵。染付は黒みがかかる。見込みに松竹梅文、周囲に草花文。外面蝶文と草花文。底部に「富貴長春」。輪花。疊付無釉。肥前産カ。

図3-11 A-小皿 1点

10と同モチーフ。錦手。朱・金色の上絵。染付は黒みがかかる。見込みに松竹梅文、周囲に草花文。底部に「富貴長春」。輪花。疊付無釉。肥前産カ。

図3-12 B-小皿 1点

山水文と帆掛舟、橋上に人物文。外面モチーフ不明の染付。疊付無釉。

図3-13 B-小皿 9点

見込みに銀杏文、周囲に鎬文が放射状に巡る。外面モチーフ不明の染付。疊付のみ無釉。

図3-14 B-小皿 20点

見込み麒麟文。外面唐草文。輪花。疊付無

釉。底面に口に「辰」の染付。

図3-15 B-小皿 19点

内外面に蒲公英文、高台内に略した渦福。変形の輪花。疊付無釉。

図3-16 C-小皿 3点

見込み鳳凰文、周囲に渦巻きと太陽型の文様が放射状に連記。外面は型紙印判の染付。輪花。疊付無釉。

図3-17 C-小皿 10点

月下に兎の染付。高台に洗濯板状の削り痕。疊付から高台内部まで無釉。黒兎と白兎の文様がみられる。高台内に墨書があるが読めない。

図3-18 C-小皿 20点

縁折皿。見込みに牡丹唐獅子の陰刻、その上にダミを施す。疊付無釉。

図3-19 C-小皿 28点

内面菖蒲文。口縁部に鉄釉。疊付無釉。染付。被熱による歪み大。

図3-20 C-小皿 100点

見込み鳳凰文。外面文字文。疊付無釉。

図3-21 C-小皿 4点

内面山水文。口縁に鉄釉。疊付無釉。釉薬の縮みによる露胎部目立つ。

図3-22 D-小皿 3点

型紙印判の染付、山水文、橋上に人物。周囲に草花文。疊付無釉。内面に円形の目跡四ヶ所。

図3-23 D-小皿 49点

銅版転写の染付、鳳凰文、周囲に蝶文。疊付無釉。

図4-24 D-小皿 2点

銅版転写の染付、鳳凰文、周囲に唐草。疊付無釉。

図4-25 D-小皿 7点

銅版転写の染付、蝶文と竹文。疊付無釉。

図4-26 E-小皿 1点

黒色の印判染付、山水文に漢詩。周囲に四方樺文。輪花。疊付無釉。

図4-27 B-特殊皿 10点

角皿、四方切込。内面樹木文にダミ、底面に「富貴長春」。高台内にハリ跡一箇所。疊付無釉。

図4-28 C-特殊皿 3点

菱形皿、四方切込。内面に山水文。山水文とその周囲で染付の色が異なる。疊付無釉。

図4-29 C-特殊皿 1点

菱形皿。四方切込。内面に山水文。28と同型。疊付無釉。

図4-30 C-特殊皿 15点

樽型の刺身皿。見込みに鯉の陽刻、そこに染付。疊付無釉。

図4-31 C-特殊皿 14点

樽型。30刺身皿の醤油皿。見込みに鯉の陽刻、そこに染付。疊付無釉。

図4-32 E-特殊皿 1点

扇形。内面梅文・笹文・菊文。笹が緑色、花がピンクを呈す。外面菖蒲文。高台内に口に富の染付。疊付無釉。

図4-33 F-特殊皿 18点

型押成型の陶器、無釉の焼締。見込みに陽刻の文様。底部は丸みを帯び、非平面。箱書きに「信楽焼」とある。

図5-34 A-盛鉢 10点

1780~1860年(V期)

四角鉢、四方切込。見込に松竹梅文。外面唐草文。緑・朱・金色の上絵。底面「製化年製」。疊付無釉。肥前産。

図5-35 A-盛鉢 1点

1780~1860年代(V期)

見込み松竹梅文、周囲にみじん唐草、外面

唐草。蛇の目凹型高台で中心部施釉。疊付施釉。輪花。高台内に「製化年製」。肥前産。

図5-36 B-盛鉢 18点

六角鉢。見込み鳳凰文。外面に唐草。底部中央に「製化年製」。疊付無釉。輪花。肥前カ。

図5-37 B-盛鉢 1点 1820年(V期)

八角鉢。見込み筆文¹⁷、周囲に格子文、菖蒲文、笹文。蛇の目凹型高台、中心部施釉。疊付施釉。

図5-38 B-盛鉢 1点

八角鉢。見込み筆文、周囲に山水文、笹文。蛇の目凹型高台、中心部施釉。チャッツの癒着跡あり。疊付施釉。

図5-39 B-盛鉢 1点

輪花鉢。梅花文、周囲に笹・松文。蛇の目凹型高台、中心部施釉。疊付施釉。

図5-40 B-盛鉢 21点

見込み麒麟文、疊付施釉、外面唐草文、底面に口に辰の染付。蛇の目凹型高台。疊付施釉。

図6-41 B-盛鉢 1点

見込み人物文。染付けに緑・朱・金色の上絵。蛇の目凹型高台、中心部施釉。疊付施釉。

図6-42 B-盛鉢 1点

41と同モチーフ。染付けに緑・朱・金色の上絵。蛇の目凹型高台、中心部施釉。疊付施釉。

図6-43 C-盛鉢 1点

富士に薄野、高台内に口に岩の染付。蛇の目凹型高台、中心部施釉。疊付施釉。

図6-44 C-盛鉢 1点

いわゆるエンゴベ¹⁸。ロクロ成型、外面削り調整。高台端面部取。見込み草花文。疊付無釉。高台内透明釉。内面に台型の目跡五ヶ所。

図6-45 C-盛鉢 1点

型紙印判と手書きによる混合の染付。口縁部に鉄釉を施釉。蛇の目凹型高台。疊付施釉。

高台内に茶色の塗付物質。

図6-46 C-盛鉢 1点

線描の染付。蛇の目凹型高台、中心部施釉。疊付施釉。

図7-47 C-盛鉢 1点

見込み雁文、周囲に四方樺文。外面は蝶文と草花文。蛇の目凹型高台、中心部施釉。疊付施釉。

図7-48 C-盛鉢 1点

蛇の目凹型高台、中心部施釉。疊付施釉。高台内露胎部に墨書、但し読めず。

図7-49 C-盛鉢 1点

型紙印判の染付。竹文の区画と鶴文。外面唐草文。蛇の目凹型高台、中心部施釉。輪花。

図7-50 C-盛鉢 9点

銅版転写の松竹梅文、周囲に雷文・牡丹文。疊付施釉。蛇の目凹型高台、中心部施釉。輪花。

図7-51 C-盛鉢 1点

銅版転写の松竹梅文、周囲に雷文・牡丹に玉唐獅子文。疊付施釉。蛇の目凹型高台、中心部施釉。輪花。

図7-52 C-盛鉢 1点

銅版転写による灯籠に桜の染付、灯籠の後方に緑色のダミ。外面燕文。蛇の目凹型高台、中心部施釉。疊付施釉。

図7-53 C-盛鉢 1点

内面草花文に吹付によるピンクの月。木の実を茶色に施釉。蛇の目凹型高台、中心部施釉。疊付施釉。

図7-54 A-碗蓋 4点 1820~1840年代

55の蓋。格子文。取手上面無釉。肥前産。

図8-55 A-碗 4点 1820~1840年代

広東碗。格子文。疊付無釉。肥前産。

図8-56 A-碗蓋 10点 1780~1810年代

57の蓋。外面青磁釉。内面見込み五弁花、

周囲に四方樺文。取手上面無釉。

図8-57 A-碗 10点 1780~1810年代

外面青磁釉。内面見込み五弁花、周囲に四方樺文。疊付無釉。肥前産。

図8-58 B-碗蓋 1点

59の蓋内面に松竹梅文。染付に緑・朱・金・黒色の上絵。外面に鳳凰文。取手上面無釉。

図8-59 B-碗 1点

見込み松竹梅文。染付に緑・朱・金・黒色の上絵。外面に鳳凰文。疊付無釉。肥前産カ。

図8-60 B-碗蓋 11点

61の蓋。草花文、宝文。取手内に文字。取手周囲の突起部に鉄釉。取手上面無釉。

図8-61 B-碗 11点

草花文、宝文。高台周囲の突起部に鉄釉。疊付無釉。

図8-62 B-碗蓋 1点

63の蓋。外面宝文、見込み銀杏文。取手上面無釉。

図8-63 B-碗 1点

外面宝文、見込み銀杏文。疊付無釉。

図8-64 C-碗蓋 1点

上面鳳凰文、内面松竹梅文。取手上面無釉。

図8-65 C-碗蓋 2点

内面中央に「太化年製」、取手中央に辰の染付。取手上面無釉。

図8-66 D-碗蓋 3点

67の蓋。外面に鶴文、松文、取手内に「晴高園製」の染付け。全て印判。取手上面無釉。

図8-67 D-碗 1点

外面に鶴文、松文、取手内に「晴高園製」の染付け。全て印判。疊付無釉。ガラス継ぎ痕。

図9-68 A-猪口 20点 1780~1820年

市松文と格子文、内面口縁に四方樺文、見込みに五弁花。蛇の目凹型高台、中心部施釉。

畳付施釉。肥前産。

図9-69 A-猪口 1点

1750~90年代(IV期)

薄文。畳付無釉。肥前産。

図9-70 B-猪口 1点

錦手。見込み松竹梅文、口縁周囲四方樺文、外面草花文。朱・金色の上絵。畳付無釉。肥前産カ。

図9-71 B-猪口 20点

錦手。見込み松竹梅文、外面宝文。緑・朱・金色の上絵。畳付無釉。肥前産カ。

図9-72 B-猪口 1点

見込みに麒麟文、口縁周辺に雲文。外面に草花文。底面に口に辰の染付。畳付無釉。

図9-73 B-台鉢 1点

見込み山水文、高台外面に唐草文。畳付無釉。白磁部全体的に青みがかかる。付高台。中位に稜線をもち、口縁がわずかに外反する。肥前産カ。

図9-74 B-盃洗 1点

見込み鳳凰文。外面唐獅子、山水文。畳付無釉。輪花白磁部全体的に青みがかかる。

図9-75 B-盃洗 1点

錦手。見込み松竹梅文(円弧を描かない)。緑・朱・金・黒色の上絵。畳付無釉、高台内施釉。

図10-76 F-調理鉢 1点

ロクロ成型。外面に削り調整痕。高台端部面取り。透明釉。見込みに目跡6ヶ所。底部無釉。下面に○に山形の刻印がある(拓本提示)。

図10-77 F瓶 1点

ロクロ成型。外面削り調整。削り出し高台、端部面取。外面、いわゆる白化粧による白釉。その上に緑色の装飾。畳付無釉。

図10-78 F-甕 1点

ロクロ成型。外面削り調整。削り出し高台、端部面取。内外面飴釉。口縁に同釉の上掛け。底部無釉。見込みに台形の目跡5ヶ所。

図10-79 F-甕 1点

ロクロ成型。外面削り調整。内外面茶色釉。口縁に黒釉上掛け。底部無釉。見込みに台形の目跡5ヶ所。頸部切立型。

図10-80 F-甕 1点

ロクロ成型。外面削り調整。削り出し高台、端部面取。内外面飴釉。口縁に黒釉上掛け。底部無釉。見込みに台形の目跡5ヶ所。

図10-81 F-甕 1点

ロクロ成型。外面削り調整。内外面濃緑色釉。口縁に白釉上掛け。頸部切立型。底部無釉。底部に窯詰めの時の粘土癒着痕あり。

図10-82 F-甕 1点

ロクロ成型。外面削り調整。内外面茶色釉。底部無釉。切立型の頸部。

図10-83 F-甕 1点

寸胴型。ロクロ成型。外面削り調整。内外面茶色釉。底部無釉。浅い削り出し高台。

5-b 箱資料

図12-84 A

金属角釘を使用。外面に「ろうそく」の墨書。69を収納。

図12-85 A

覆い蓋。竹釘を使用。外面漆、柿渋ないしは膠塗り。上面に「信楽焼之皿二拾枚 外口□二枚」の墨書。33を収納。

図12-86 A

蓋無し。破損。側面竹釘、底面のみ金属角釘を使用。底部に墨書きがあるが読めない。収納物無し。

図13-87 A

側面竹釘、底面に金属丸釘を使用。箱の作り自体は古く、金属丸釘は後年の補修とみたい。蓋の裏に「藤兵衛」の墨書。30・31を収納。

図13-88 B

竹釘を使用。袴部に葛箆掛けとなる紐通あり。外面に「朱塗木皿貳拾」の墨書き。19を収納。

図13-89 B

竹釘を使用。袴部に葛箆掛けとなる紐通しあり。外面に「浅口朱木皿」の墨書き。57・58を収納。

図14-90 B

側面竹釘、底面金属角釘を使用。袴部の紐通しに荒縄が通る。葛箆掛けとなる。箱の上面に「山木(刻字)錦手角皿」側面に「唐津錦手角皿」、蓋の裏に「文政二巳卯二月吉日求之」の墨書。「山木」は柴田藤兵衛家の屋号。収納物は無いが、箱書から元来34が収納されていた可能性が高い。

図14-91 B

蓋無し。竹釘を使用。仕切りの補強に金属角釘を側面から打ち込む。収納物無し。

図14-92 C

格子組。竹釘を使用。底部袴型。2を収納。

図15-93 C

部分的に格子組。竹釘を使用。外面漆ないしは膠塗り。底部袴型。引上げ戸。底面に「天保八丁酉年七月吉祥日来之 陣場村 柴田藤兵衛」と墨書。収納物無し。

図15-94 D

側面竹釘、底面に金属丸釘を使用。3を収納。

図16-95 D

側面竹釘、底面に金属丸釘を使用。7を収納。

図16-96 D

側面竹釘、底面に金属丸釘を使用。20を収納。

図16-97 D

側面竹釘、底面に金属丸釘を使用。72を収納。

図17-98 D

側面竹釘、底面に金属丸釘を使用。39を収納。

図17-99 D

側面竹釘、底面に金属丸釘を使用。14を収納。

図17-100 D

側面竹釘、底面に金属丸釘を使用。23を収納。

図17-101 E

金属丸釘を使用。取手木片。56を収納。

図18-102 E

金属丸釘を使用。取手木片。61・62を収納。

図18-103 E

金属丸釘を使用。取手木片。35を収納。

図18-104 E

金属丸釘を使用。取手木片。15・18を収納。

図18-105 E

金属丸釘を使用。ドア状の戸。27を収納。

6 柴田家資料の分析

当資料は、山形県村山地方の地域社会において近世に村役人を勤めたイエが、近世から近代にかけて受容した陶磁器製品とその収納のための箱群で構成される。

柴田家の陶磁器資料は、皿・碗・鉢といった食膳具が主体を占める。この理由としては、同じ陶磁器製品でも調理鉢や貯蔵具が、確実に消耗する耐久消費材であるのに対し、食膳具は事後的な破損に見舞われない限り、半恒久的な使用が可能であり、蔵への収蔵が求められる種類の財産であることが考えられる。

75種を数える食膳具の内、図33だけが陶器製品で、他は全て磁器製品である。

磁器製品の内訳は、大皿1種、計1点、中

皿 8 種 61 点、小皿 17 種 278 点、角型や菱形などの変形皿 6 種 62 点、鉢 20 種 45 点、蓋付碗 6 種 14 点、蓋のみ 2 種 3 点、猪口 5 種 43 点、台鉢 1 種 1 点、盃洗 2 種 2 点である。

大皿や台鉢・盃洗・大型の鉢といった特殊な、もしくは大型製品は 1 種 1 点で構成される傾向があるのに対して、中皿、変形皿、中小型の鉢、猪口といった中～小型製品は 1 種につき約 7～15 点を数える。特に小皿が多い。

この理由としては使用時に、小型製品は個人に配置される傾向があるのに対し、大型製品は多人数に一個が配置される特性を有していることが考えられる。

この内、A 群とした製品は、大皿 1 種 1 点、小皿 2 種 2 点、盛鉢 2 種 11 点、蓋付碗 2 種 14 点、猪口 2 種 21 点。B 群とした製品は、中皿 4 種 50 点、小皿 4 種 49 点、特殊皿 1 種 10 点、盛鉢 7 種 44 点、蓋付碗 3 種 14 点、猪口 3 種 22 点、台鉢 1 種 1 点、盃洗 2 種 2 点。C 群とした製品は、小皿 6 種 165 点、特殊皿 4 種 33 点、盛鉢 11 種 19 点、碗蓋 2 種 3 点。D 群とした製品は、中皿 2 種 2 点、小皿 4 種 61 点、碗蓋 2 種 4 点である。

各群の合計を検討すると、A 群 9 種 49 点、B 群 25 種 192 点、C 群 23 種 220 点、D 群 8 種 67 点となる。D 群は生産時期的に C 群に含んで検討を行うのが適切であろう。

ここから A 群に比べて、B 群と C・D 群は製品の種類・個数ともに増加することがわかる。A 群から C・D 群への変化は、明確な生産技術によって区別でき、かつ近世から近代にかけての変化であることが想定される。ここから近世より近代段階の陶磁器の収蔵量が多いことがわかる。

器種の構成について検討すると、皿・鉢・

猪口などの小型製品は、近世から近代にかけて幅広く収蔵される。対して、大型の盛鉢・皿などの製品は、A 群では大皿 1 点のみで、C～E 群の近代以降の製品の比重が高い。

この傾向と前述した器種構成の傾向を、柴田家の磁器受容の傾向として捉えるならば、近世から近代にかけて、磁器食膳具の受容器種が変化したことが想定できる。またその基底には食前具の使用方法の変化を想定することができるだろう。

磁器製品に対して陶器製品は、9 種 26 点と少数である。加えて、33 の皿・76 の調理鉢・77 の瓶は蔵に収蔵されていた資料であるが、甕類は蔵の軒下に置かれていたもので、正確には蔵内に収蔵されていた資料ではない。

しかし、柴田家の陶磁器製品の器種における素材の構成を端的に示すため、軒下の甕資料を報告資料に加えることにした。

ここから食膳具に関しては磁器製品に偏った受容が想定される。対して陶器製品は 76～83 にみるように、貯蔵具・調理具を主体に受容したことが考えられる。

同器種である限り、陶器製品より磁器製品が高価であることは一般的に認識されている。磁器原料の埋蔵地域・生産技術の広がり有限定的で、磁器生産地が陶器生産地に比べて少数である事実からも、この認識は可能である。ここから柴田家の食膳具は陶器に比べて価値の高い磁器製品で構成されているといえる。

ただし、33 の陶器皿については、形態・施文ともに特殊な製品であり、また箱書に産地として有名な「信楽」が表記されるなど、磁器製品に対して安価な製品だと安易に位置付けることはできない。逆に陶器でも食膳具に関しては、特殊な製品のみを受容している、

と捉えるべきかもしれない。

調理鉢・貯蔵具以外では、22・44以外に「目跡」がないことも注目される。目跡とは製品の大量生産に伴ってつく、製品を重ねて焼いた跡である。目跡はキズとして認識され、陶磁器製品の商品価値を落とすことになる¹⁹。19世紀第二四半期～第三四半期以降、地方窯業の多くが積極的にこの方法を導入しており、近世から近代にかけて目跡が付く製品が地方市場に沢山出回ったことは間違いない。

当資料における目跡を伴う製品の少なさからは、柴田家の食膳具には、積極的に目跡がない製品が選択されたことが推定できる。つまり山形県村山地方における村役人層の食膳具の受容については、陶器より磁器、磁器の中でも目跡のない製品と、より商品価値の高い製品を選択したと考えられるわけである。

製品の受容開始時期については、図1の皿が、17世紀中葉の肥前製品であることがほぼ確定できる²⁰。しかし製品のまとまりに注目すれば、単品の上、同時期の製品が他には確定できず、この資料を根拠に柴田家の陶磁器、特に磁器製品の受容開始に言及することは難しい。

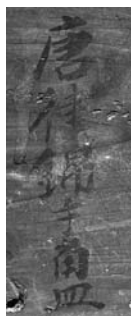
逆に18世紀末～19世紀前葉までの生産が想定できる34・54・55・56・57といったA群の複数の製品については、同一の品を多数所蔵しており、器種・数量共に、まとまりを形成していることがわかる。これには肥前製品が多数含まれている。このまとまりを重視すれば、この時期に肥前産を中心とした磁器製品の受容が開始されたことを推測できるだろう。

また10・11・34のように、A群に属し、上絵が施される製品が収蔵されている点はおお

いに注目できる。

上絵が施される磁器製品は、生産工程が多く、通常の磁器製品に比べて高級品だと認識できる。このような製品は近隣の消費地遺跡から出土例をみることができない。

90の箱には、「唐津錦手角皿」という墨書(a)が見られ、この箱に錦手の角皿、つまり上絵のある角皿が収納されていたことがわかる。その表現を収蔵品と比較し、箱の法量を加えて検討すれば、鉢と皿との器種の認識は異なるものの、これが34の製品に相当することが想定できる。



(a)



(b)



(c)

また、蓋の裏には「文政二巳卯二月吉日求之」の墨書(b)、蓋の表には柴田籐兵衛家の屋号である、「山に木の刻字」(c)がみられることから、柴田家自身が文政二(1819)年に、この製品を求めた可能性が高い。ここから村山の村役人層が、文政二(1819)年頃に34のような錦手製品を受容できていたことが理解できる。

これは、同時期の製品のまとまりとの関係も含め、陶磁器受容に関して、地域・イエ・時期・製品を明らかにできる、発掘資料からは得られない重要な情報といえる。

また箱資料には、90以外にも内容物・収蔵者・年月を示す箱書がみられる。87には収蔵者である「藤兵衛」、93からは、収蔵者「陣場村柴田藤兵衛」と共に「天保八(1837)年」といった何らかの製品を受容したと推測される年号の情報が得られる。

84・88・89のように内容物と符号しない箱書からも、漆器やろうそくなど過去の収蔵物が分かる。特に漆器に関する情報は、陶磁器製品との補完関係や移行関係が推測できる情報となる。

また箱の編年が一程度明らかになる。加工に使用する釘の種類が竹釘・金属角釘の並行使用から竹釘と金属丸釘の段階へ変化することをもとに²¹、形態的特徴がA～Dにかけて変化することに言及できる。

このような蔵の調査において、箱資料は、蔵という「遺跡」の中の「遺構」にも例えることができる。箱資料の編年を検討することは、蔵調査における有効なモノサシを提示することになり、蔵資料の理解を深めるための基礎的データになりそうである²²。

本稿では、柴田家の蔵資料単独で、その器種・時期・数といったセット関係と箱書きから地域社会における村役人層の陶磁器受容についての検討を試みた。この結果、近世から近代にかけての器種構成の変化と、18世紀末～19世紀前葉頃に磁器食前具の受容を開始した可能性、そしてそれらに、より商品価値が高い製品が選択されていた可能性が推定できた。特に上絵製品のような高級品の受容が19世紀の第一四半期に行われていたことは、重要なデータとなる。

しかし前述したように蔵資料を用いた陶磁器の流通・消費についての実証的研究には、

適切な生産地遺跡・消費地遺跡・古文書・他の蔵資料との比較による複合的研究が必要であり、今後はこのような資料の調査を行い、その比較によって本データの実証を進めるつもりでいる。

7 柴田家資料の考古学的意味

柴田家陶磁器資料のような蔵資料の認識については、今後、近世考古学における議論が求められるだろう。

本調査の根本には、地域社会における「近世考古学」のあり方についての基本的問題がある。

前述した埋蔵文化財体制が近世を網羅していないことは大きな問題ではない。問題は、開発が及んでいない地域社会において、近世の考古学を推し進めていくと、近世の生活面が現代の生活面と連続することに気づくことにある²³。

寺社・仏閣を始め、地域にのこる古民家・地割などは、地表に近世の痕跡をとどめ、表土には肥前系磁器が散見できる。

「埋蔵化しなければ遺跡ではない」という認識を否定できるのであれば「遺跡が地表に現存する状況が見て取れる」わけである²⁴。

五十嵐彰氏の言葉を借りれば、近世の痕跡は、連続的遺跡として存在する²⁵。東京都の江戸遺跡のように、大規模に埋蔵化した遺跡と異なり、地域社会におけるこの連続性は、現在の地表・建築物への連続性となる。

このような状況を考慮したとき、他時代のように行政発掘が担保されていない、もしくは痕跡が埋蔵化していない近世に、中世以前の日本考古学と同じ手法・資料観をもって研究を進めることは有効ではないのではないか。

「江戸時代という近接した時代にまどわされることなく、考古学的な目的と方法を忘れてはならない」とは小泉弘氏の言葉であるが²⁶、元来無文字社会を研究対象とする考古学的な目的と方法が、近世研究においてどのように有効であるのかの議論を忘れないと考える。

近藤義郎氏は、歴史考古学における文献に頼らない社会描写の難しさを指摘し、歴史考古学における考古学の自立性に対して必要性・重要性の低さを主張した。これは歴史考古学に対する批判的意見²⁷であるが、このような見解を肯定的に受け止めることで、次代の近世考古学の姿が見えてくるように思う。

それは「考古学」というより「発掘資料」への自立にこだわるのではなく、連続する近世の痕跡を有効に資料として取り込むことではないか、と考える。

関口日記や柴田家の陶磁器資料も、このような連続した近世・近代の痕跡の一つである。

地域社会には、蔵資料をはじめとして、近世・近代と現代が連続する痕跡が豊富に所在する。これらについての調査・研究の進展が近世考古学にとって有用になるのではないかと²⁸、柴田家資料はそのようなことを示唆していると考ええる。

最後に本稿の作成に際して、調査の機会を与えてくださった岩田浩太郎先生、資料調査にご理解とご許可をいただき蔵に立ち入らせてくださり、あつかましく何度もお邪魔する私をあたたかく迎えてくださった柴田功氏と奥様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

¹ 近代に町村制が敷かれた後、明治22年に金井村となり、昭和29年に山形市に編入される。昭和40年代から区画整理が行われ、現在は住宅街が主体となっている。

柴田家が村役人を勤めたことに関する史料は、本稿では提示できないものの、ほぼ確実といえる。

² 志村直愛「山形市陣場の田中家住宅について」(『東北芸術工科大学紀要』No.17、2010年)

³ 本棟札資料は山形大学に寄贈されている。

⁴ 柴田功氏からの聞き取りによる。蔵の扉にも「明治十五年午四月」の年号が刻字されている。

⁵ 解体はまだ先のことで、蔵は現在も現地に建っている。内部から拝見すると蔵の上部の壁に周囲を一巡するヒビが入っていることがわかる。

⁶ 中川成夫・加藤晋平「近世考古学の提唱」『日本考古学協会第三五回総会研究発表要旨』(日本考古学協会、1969年)

加藤晋平氏は、当時この発表は評価されなかったと2011年7月22日江戸遺跡研究会第128回定例会での記念講演において述懐している。

⁷ 大橋康二『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』(ニューサイエンス社、1989年10月)

大橋康二『古伊万里の文様初期肥前磁器を中心に』(理工学社、1994年5月)

大橋康二「海外流通編」『伊万里市史 陶磁器偏古伊万里』(伊万里市、2002年3月)

大橋康二『世界をリードした磁器窯肥前窯』(新泉社、2004年4月) など多数

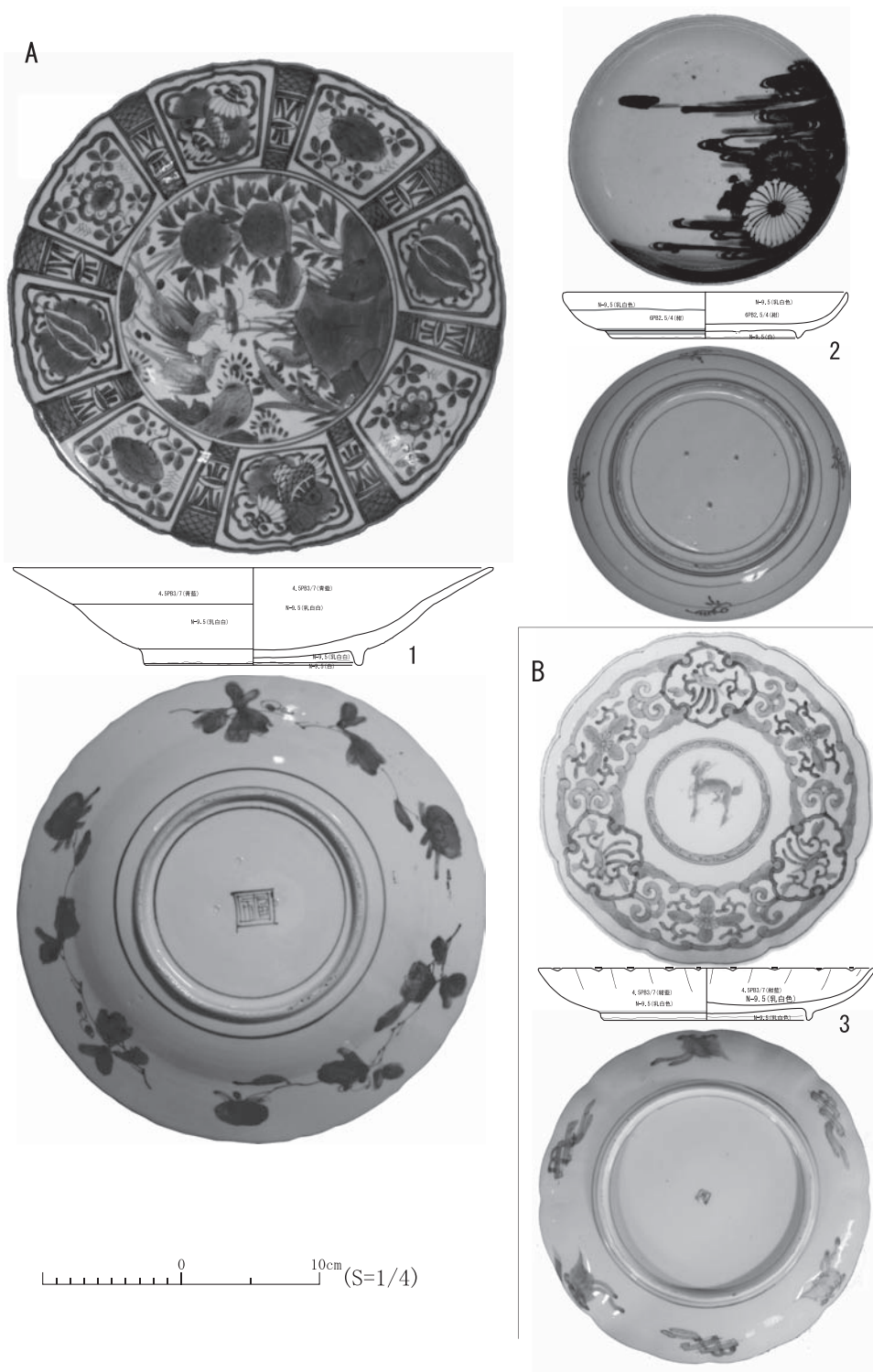
⁸ 平成10年(1998)9月29日付文化庁通知「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」には、「埋蔵文化財として扱う範囲に関する原則」として「(1)おおむね中世までに属する遺跡は原則として対象とすること(2)近世に属する遺跡については地域において必要なものを対象とすることができること(3)近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができること」とある。

⁹ 『季刊考古学 第110号 幕藩体制に関わる近世陶磁器』(雄山閣、2010年2月) 近年の近世

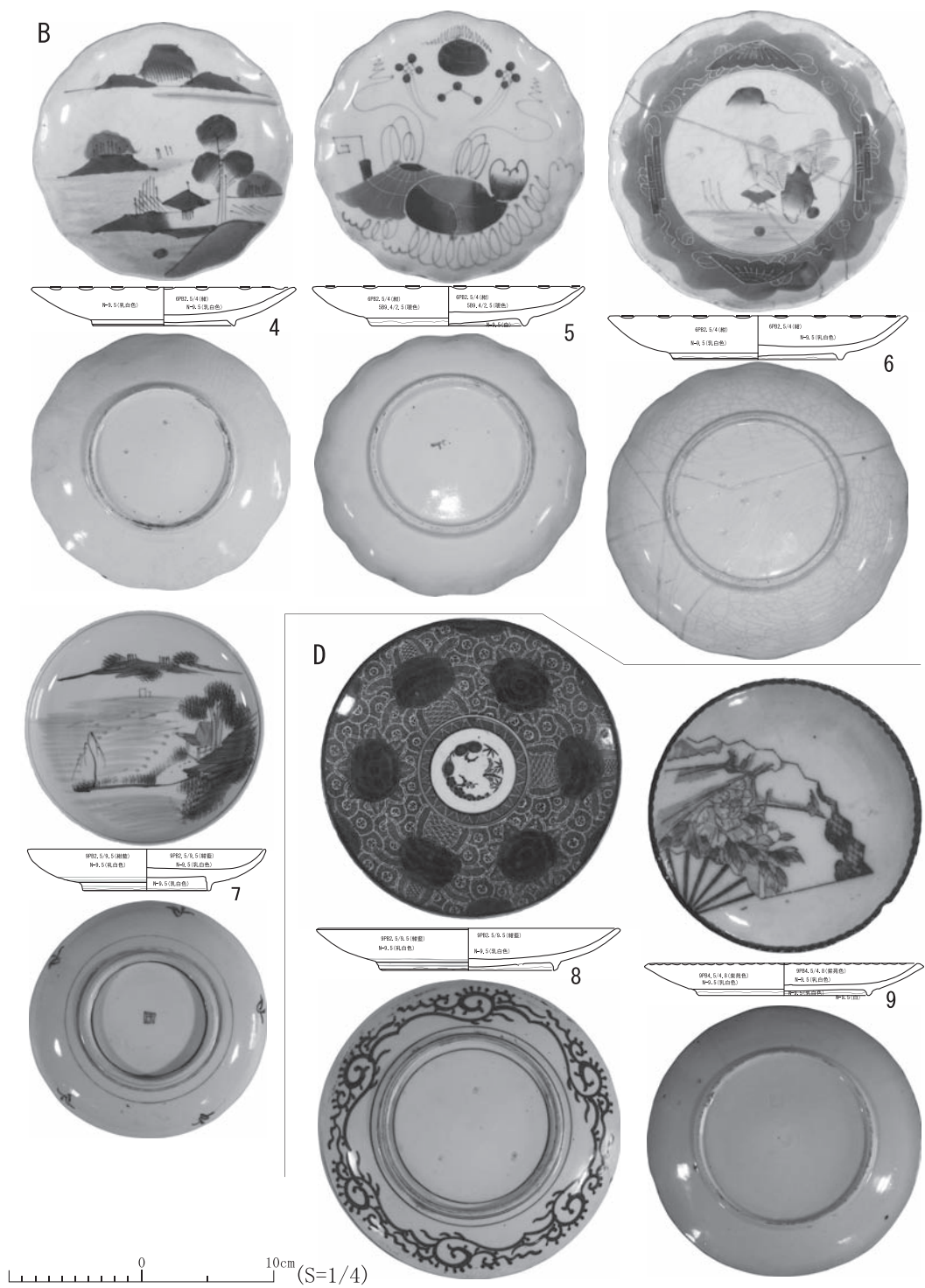
- 陶磁器研究の成果として本誌をあげる。「全国の主な城下町での陶磁器と在地の焼物流通」において、多くの論考が産地同定に基づいて議論を行っていることがわかる。
- ¹⁰ 九州近世陶磁学会『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 関東・東北北海道編』（九州近世陶磁学会、2009年2月）
高橋拓「近世後期における地方窯業製品の需要層に対する考察」（『さあべい』第25号、2009年5月）本稿における著者の論考は、出土資料の分析によるものだが、まさにこのような欠点を克服することができなかったと自己批判する。
- ¹¹ 森本伊知郎「陶磁器にみる発掘資料と文献史料」（『季刊考古学 第53号 江戸時代の発掘と文化』雄山閣、1995年11月）25～31頁
- ¹² 国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告第89集 国産記年銘土器・陶磁器データ集成上・下巻』（2001年3月）記年銘陶磁器の代表調査例として提示する。
- ¹³ 近年、地方窯業の研究が各地で行われ、地域的な編年を組む研究をみることができる。例としては富元久美子氏による飯能焼の編年。ただし本例も磁器ではない。
富元久美子「飯能焼原窯跡の研究（1）一年代と編年」（『飯能市郷土館研究紀要第4号』飯能市郷土館、2008年3月）
- ¹⁴ 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年 九州陶磁学会10周年記念』（九州近世陶磁学会2000年2月）
- ¹⁵ 岩本由輝『東北地域産業史―伝統文化を背景に―』271頁
奥村幸雄『瀬戸山物語―十王焼の歴史―』（江口クイブ社、1974年2月）24頁
会津本郷焼では明治13(1880)年、山形県では明治12年頃に使用開始。
- ¹⁶ Alistair Seton著・竹口桃子訳『いげ皿』（光芸出版、1993年1月）23・170頁
- ¹⁷ 筆文は、「寒山十徳」のモチーフカ。
- ¹⁸ エンゴーベ。おそらく“en gobe”。山形県山形市の平清水焼では、白化粧により陶器・黒色胎土の磁器を外見的に白磁化したものをさす。
- ¹⁹ 平清水焼青龍窯での聴き取りによる。
- ²⁰ 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年 九州陶磁学会10周年記念』（九州近世陶磁学会2000年2月）134頁－5を参照
- ²¹ 西田和彦「身近な金属のマイクロ組織を読む第32回 古くて新しいくぎ(釘)のいろいろ」（『つうしん』住友金属テクノロジー株式会社、2001年7月）現在の洋釘の使用は1877年以降。
- ²² 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『東宮遺跡(2)―遺物編―』（2012年）
東宮遺跡は天明三年八月五日(新暦)に泥流に埋蔵した遺跡であり、多数の箱も遺物として出土している。このような例から、今後、箱資料においても出土資料と蔵資料の比較が可能になると考える。
- ²³ 一例として下のような例をあげる。
山形県米沢市竹井の桃源院寺、飯豊町椿の本町寺には、表土に近世の肥前系磁器と在地陶器がまとめて廃棄されている様子を観察できる。
高畠町小郡山の武田家には今も屋敷堀を巡らせた区画が残り、織田藩主から譲られたという高畠城から移築した門がのこる。
- ²⁴ 著者が現在調査に関わらせてもらっている「ナスカ地上絵」などは、埋蔵していない遺跡の代表的例になると考える。
- ²⁵ 五十嵐彰「〈遺跡問題〉―近現代考古学が浮かび上がらせるもの―」（『近世・近現代考古学入門』（慶応義塾大学出版会、2007年10月）248頁）連続的単純遺跡についての説明から引用。
- ²⁶ 加藤晋平・小泉弘「江戸時代の考古学」（『季刊考古学』第13号、1985年11月）16頁
- ²⁷ 近藤義郎『近藤義郎と学ぶ考古学通論』（青木書店、2008年7月）21～22頁
著者は近世考古学を研究領域とするが、近藤氏の批判に同調する。このような指摘に、近世考古学にとって有効な思考が顕れていると考える。

²⁸ 加藤晋平「青戸御殿と私」(『江戸遺跡研究会会報 No.127』江戸遺跡研究会、2011年7月)11頁
著者の主張に対して、民俗学・民具研究との重複を発想される方も多いと思う。しかし中川成夫氏・加藤晋平氏による「近世考古学の提唱」が、

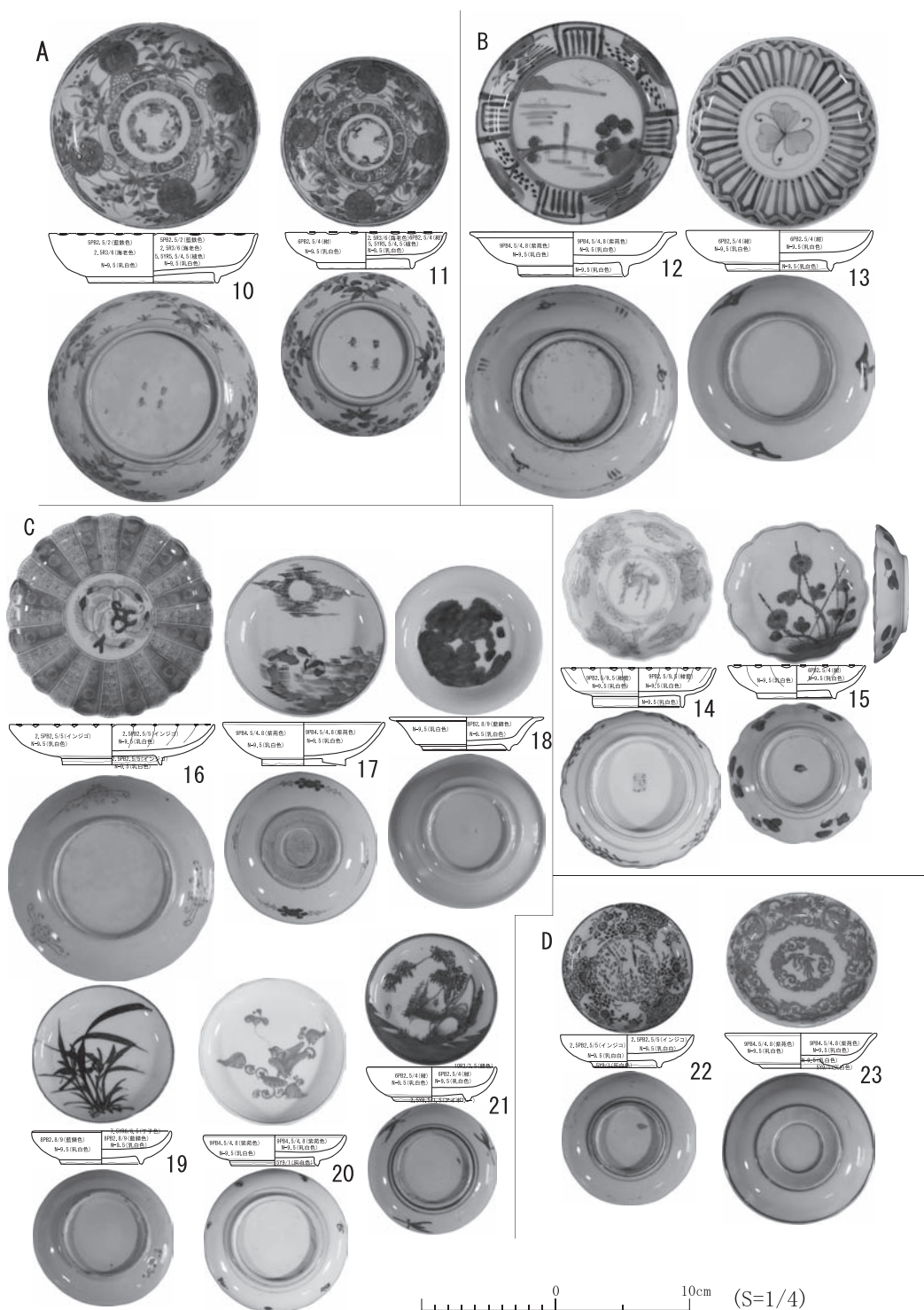
新潟における庶民の物質資料を中心にした民俗学と、近世・近代の考古学を融合した新しい研究方法の模索の後に出されたことから、地域社会の近世考古学には、民俗的資料の重要性が内在していることを無視できないと考える。



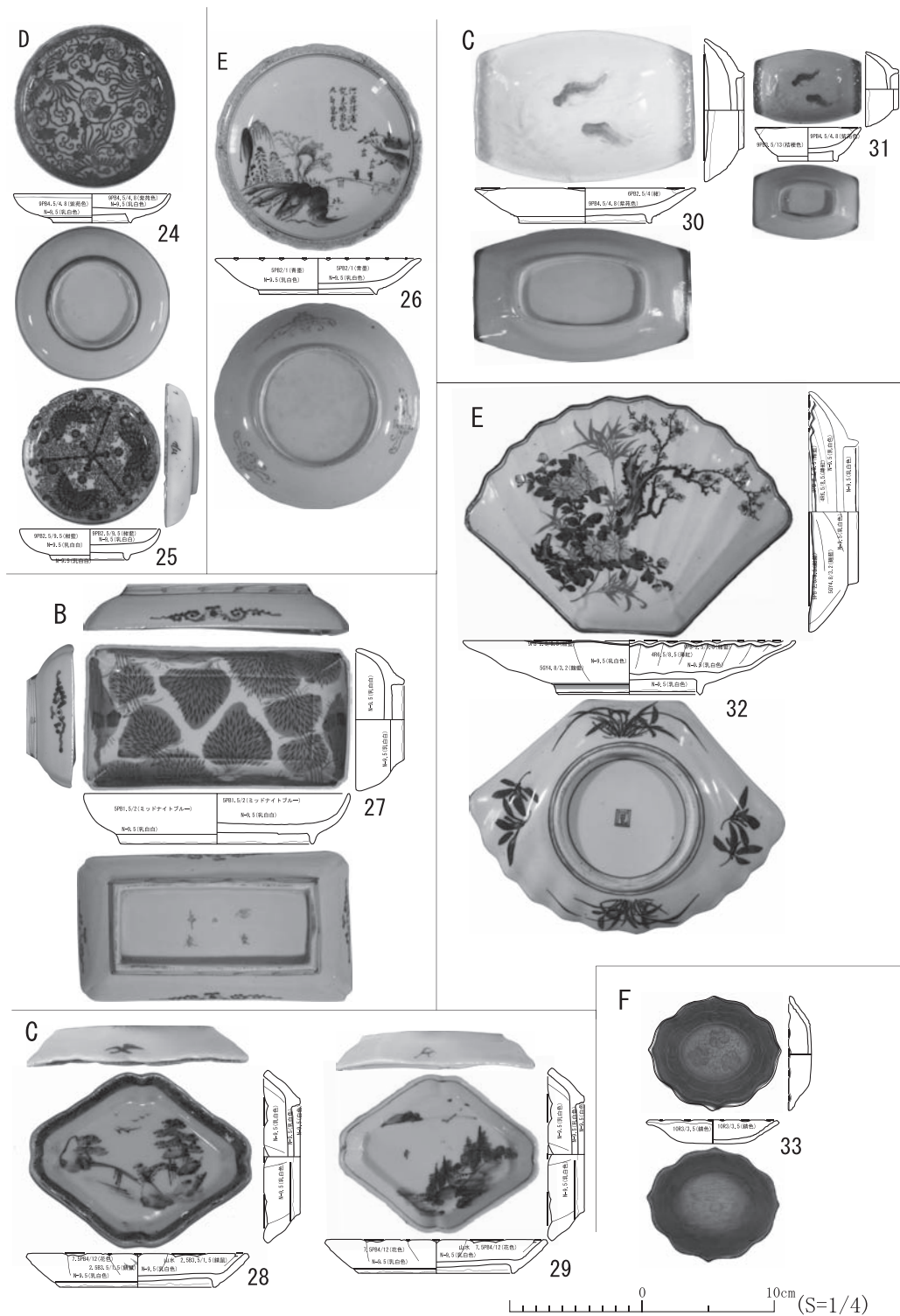
第1図 柴田藤兵衛家蔵内資料(皿)



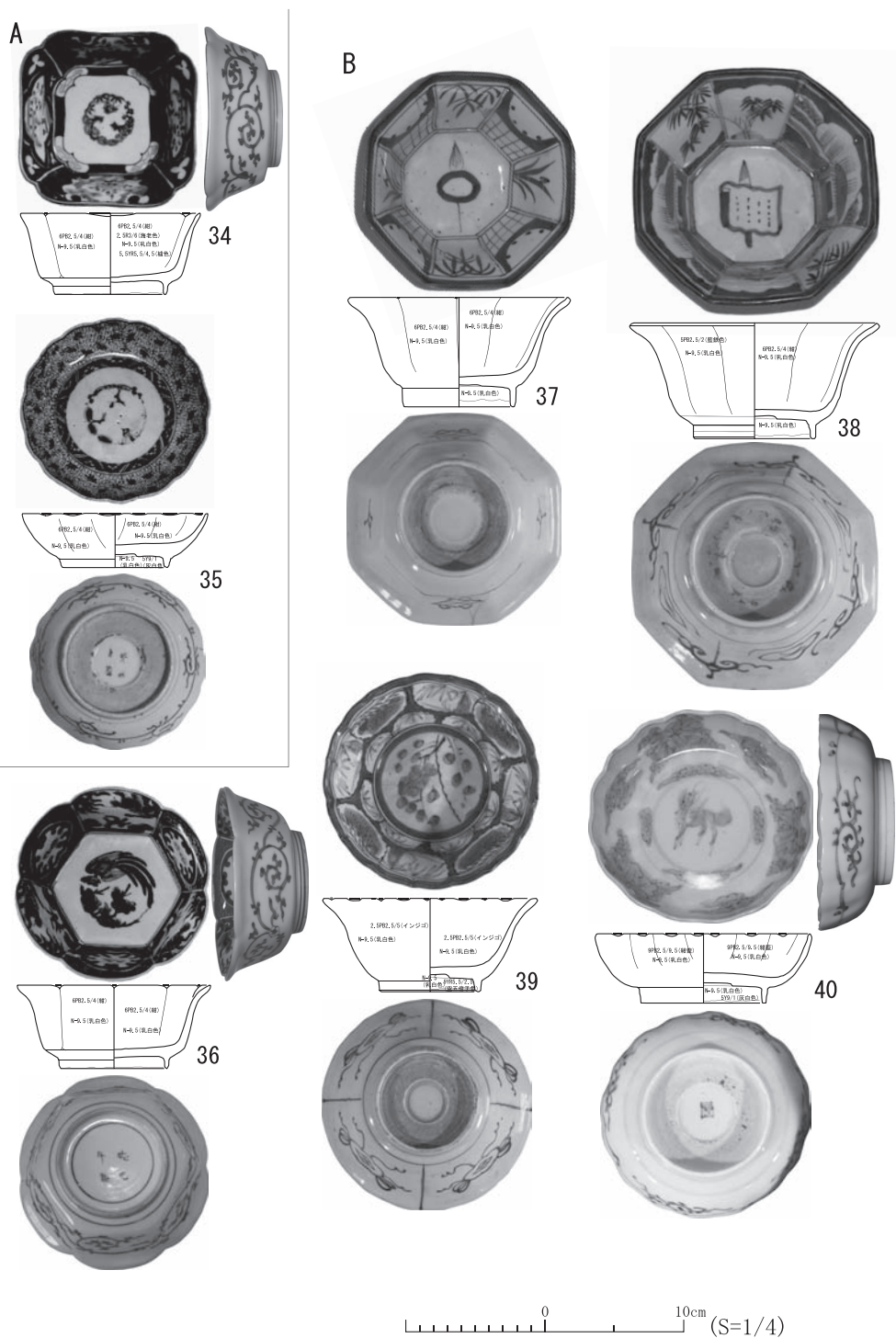
第2図 柴田藤兵衛家蔵内資料(皿)



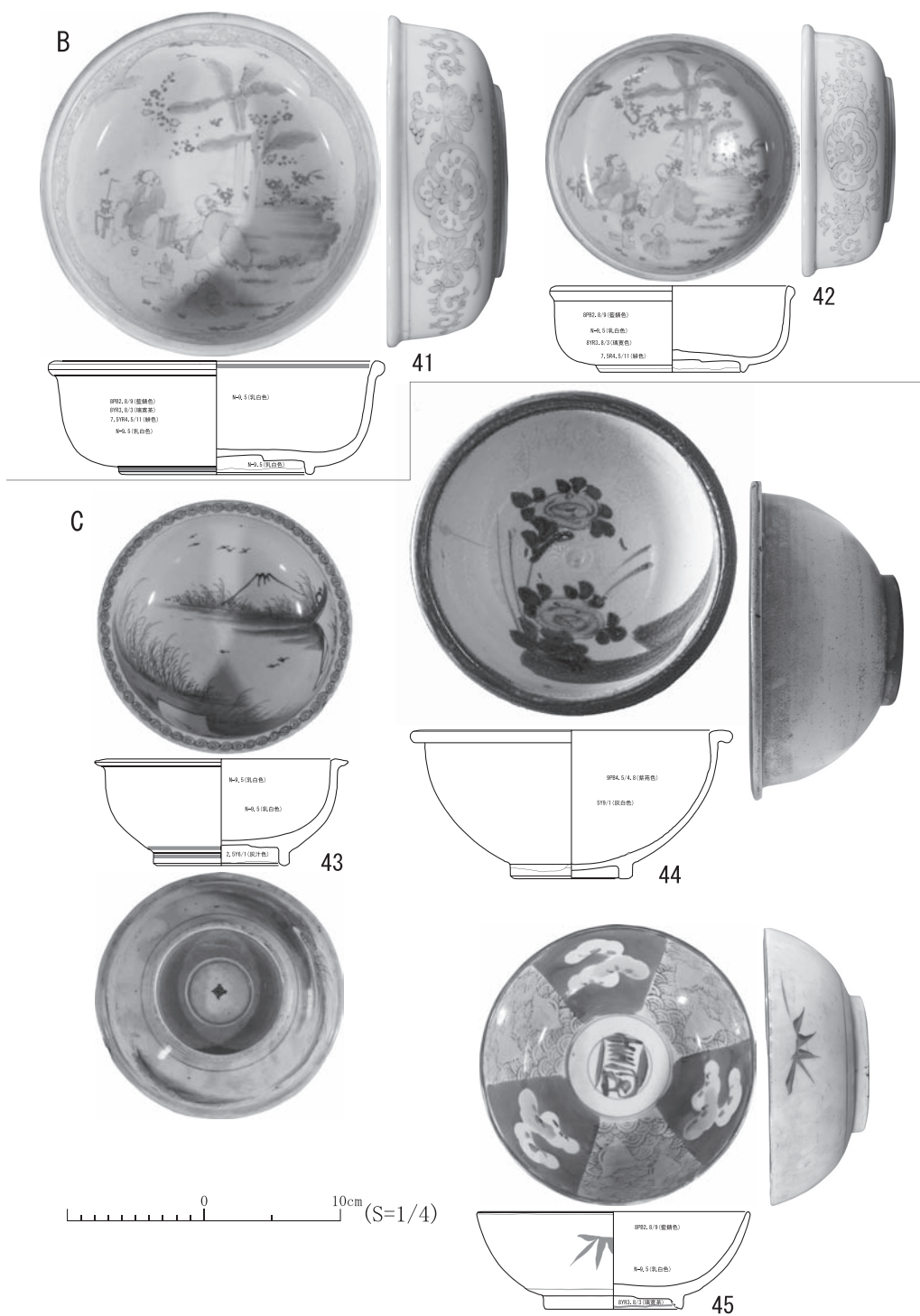
第3図 柴田藤兵衛家蔵内資料(皿)



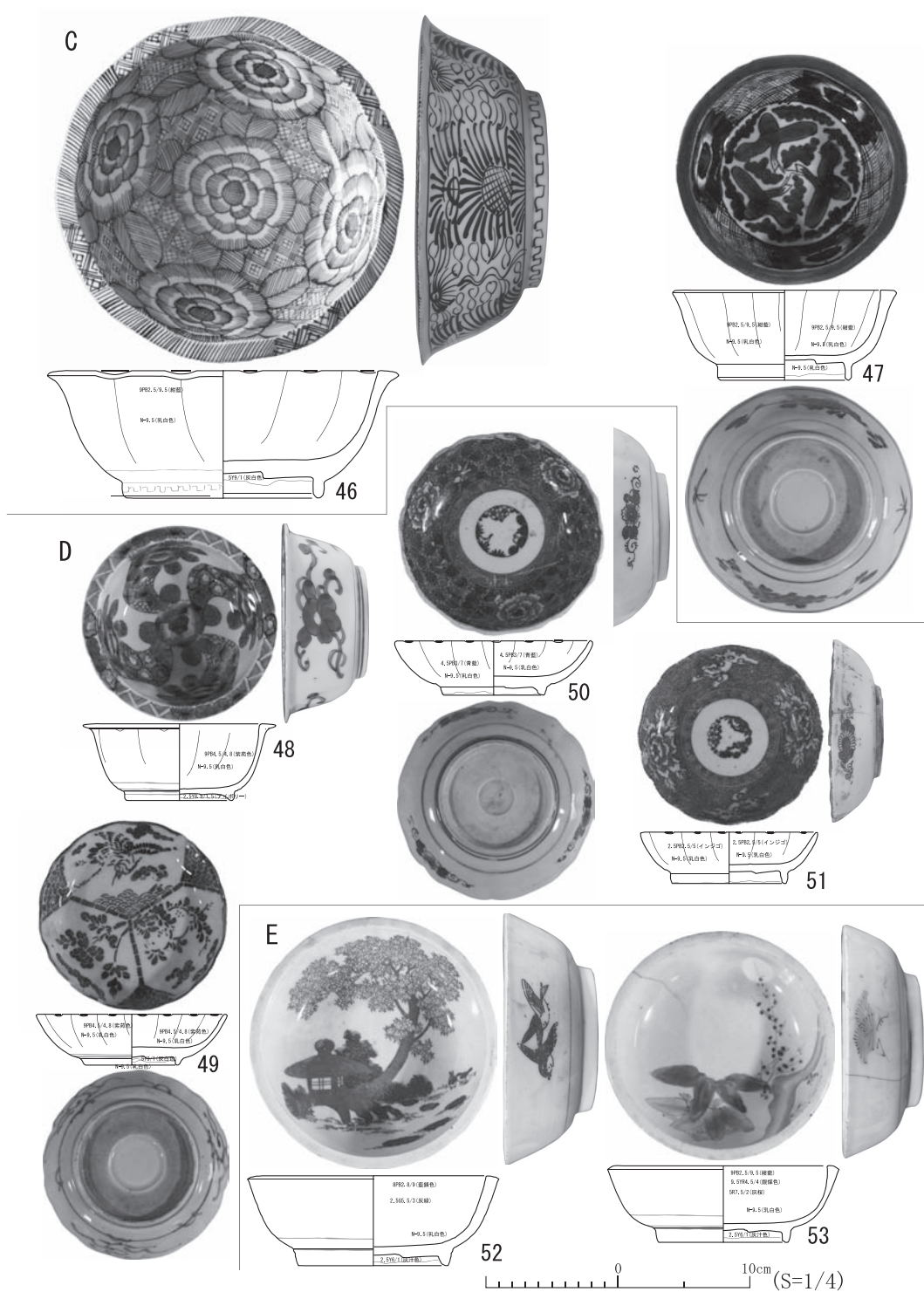
第4図 柴田藤兵衛家蔵内陶磁器(皿)



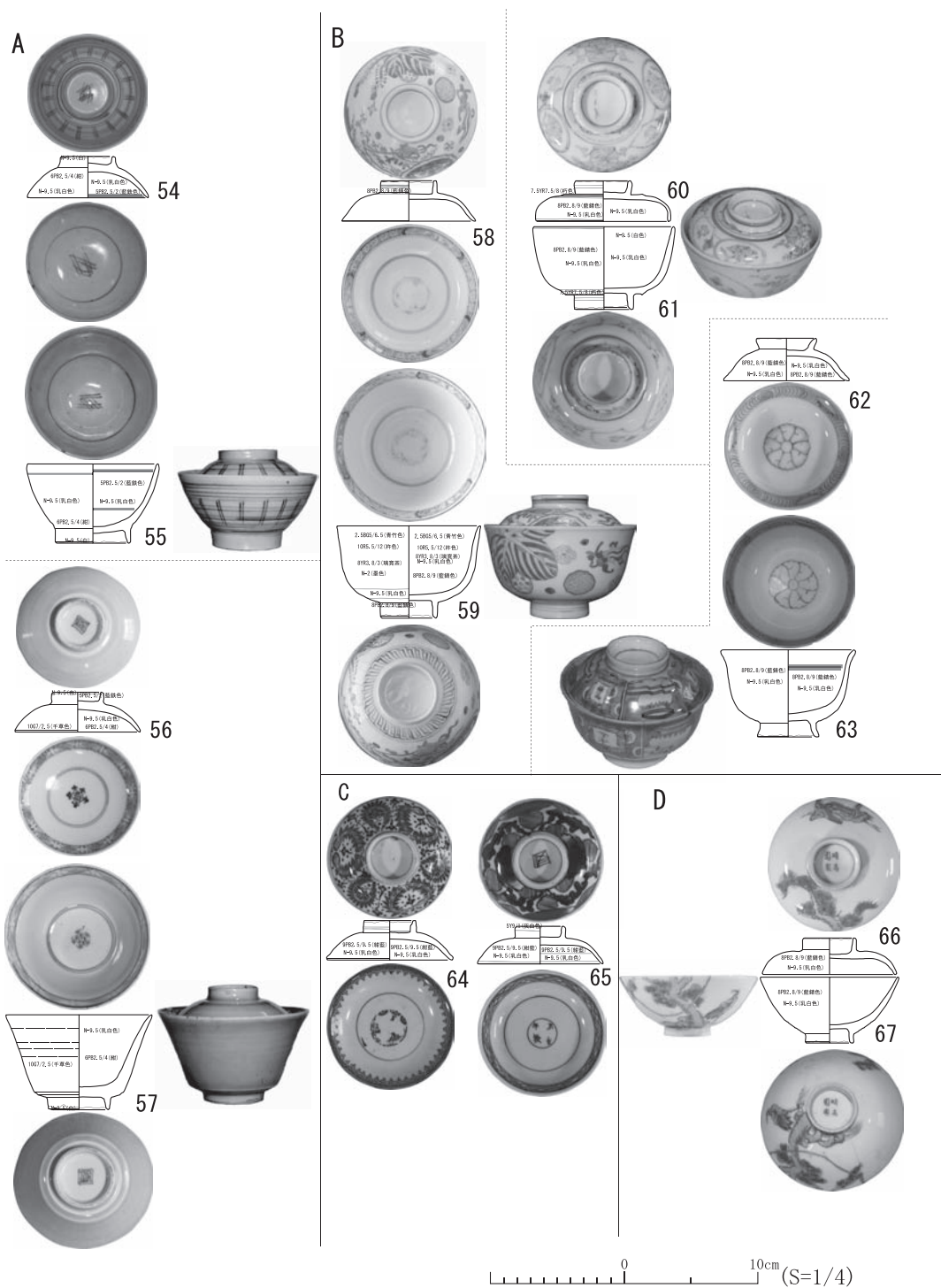
第5図 柴田藤兵衛家蔵内資料(鉢)



第 6 図 柴田藤兵衛家蔵内資料(鉢)



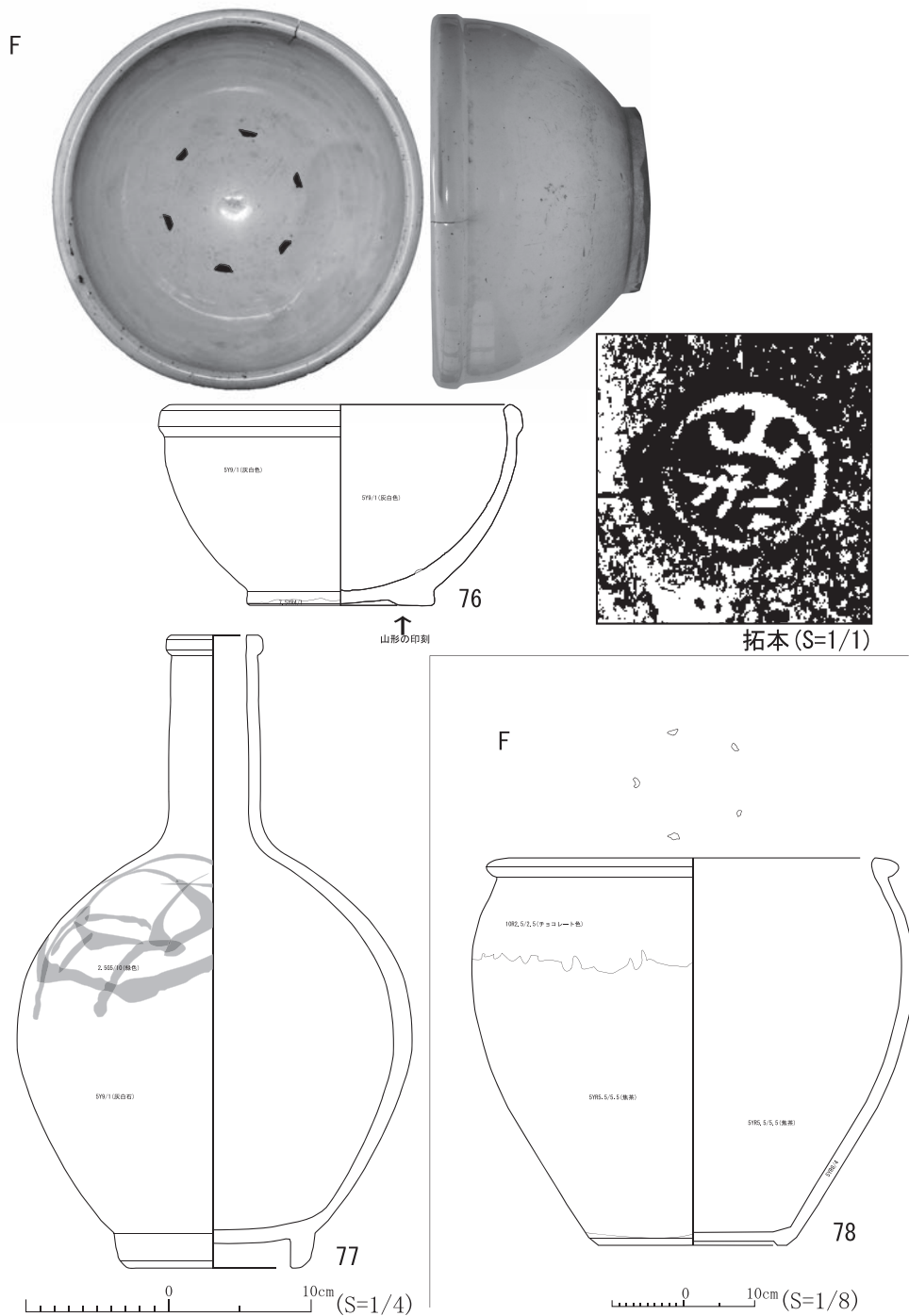
第7図 柴田藤兵衛家蔵内資料(鉢)



第 8 図 柴田藤兵衛家 収蔵陶磁器(碗)

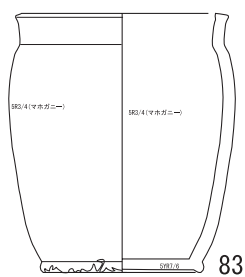
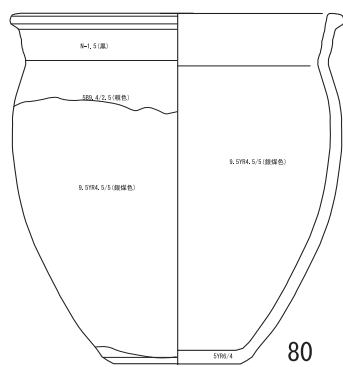
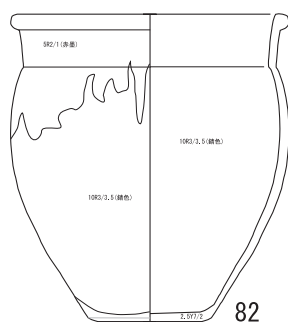
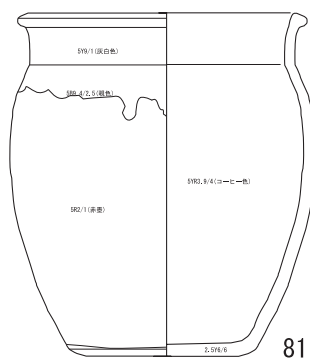
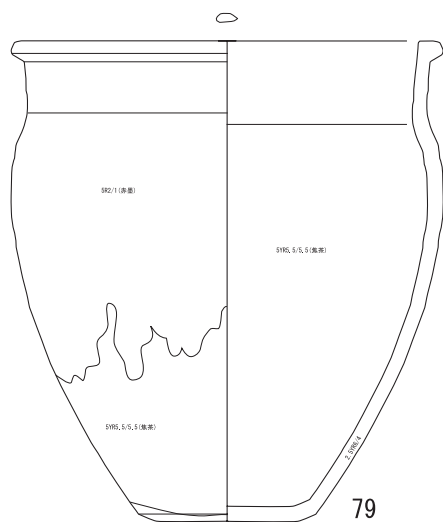


第9図 柴田籐兵衛家 収蔵陶磁器(猪口・その他)



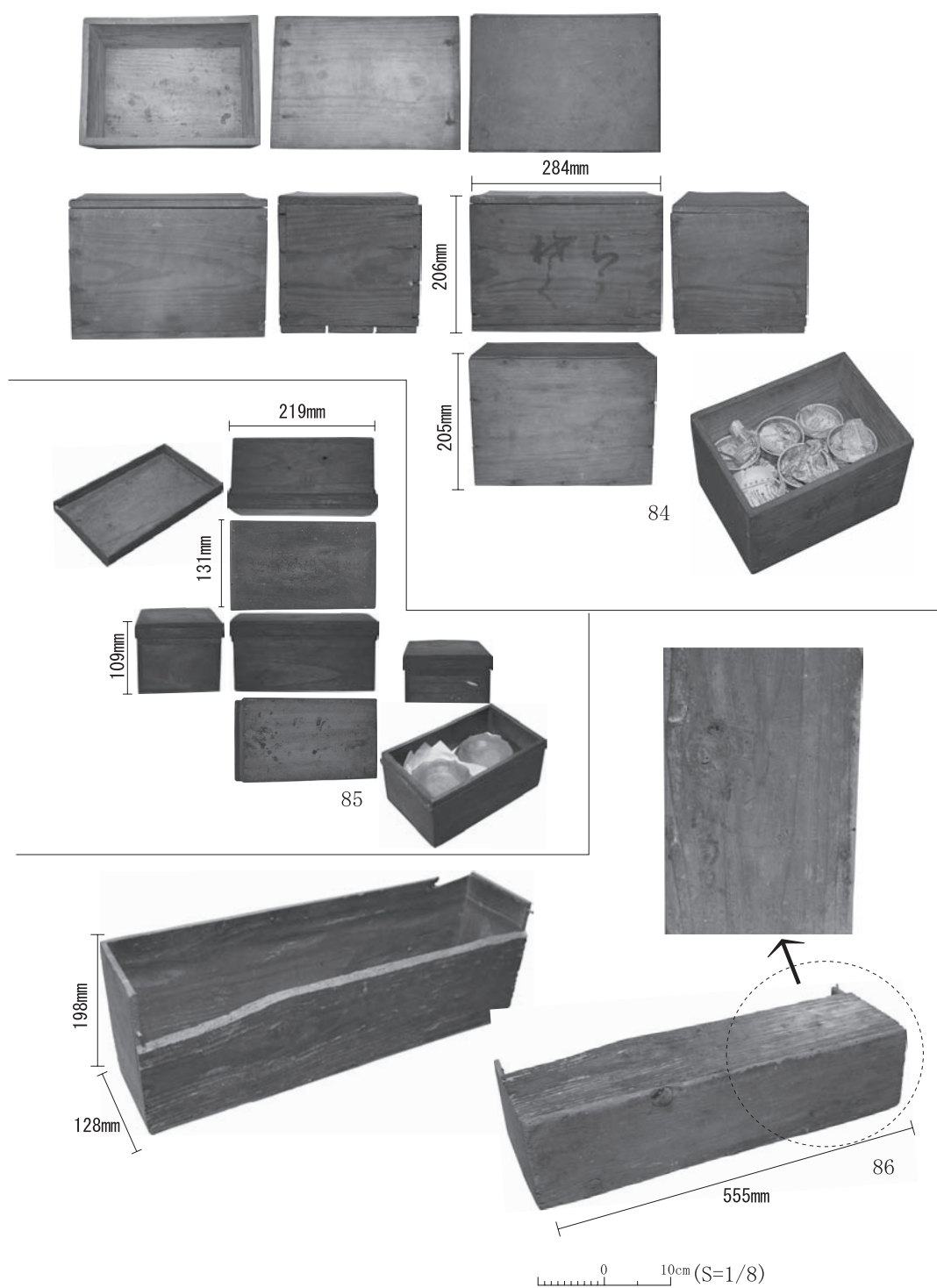
第10図 柴田藤兵衛家 収蔵陶磁器(調理鉢・瓶・甕)

F

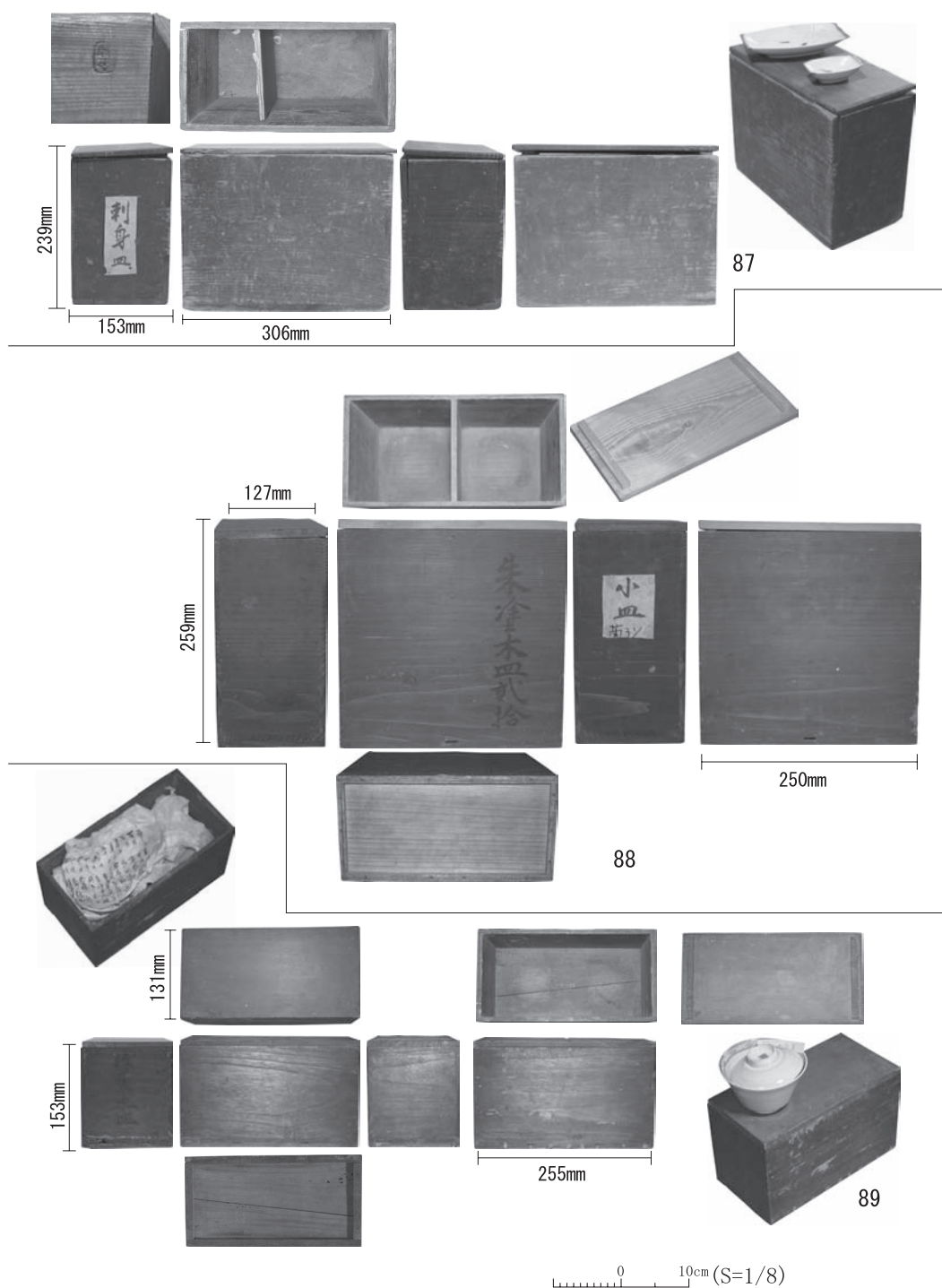


0 10cm (S=1/8)

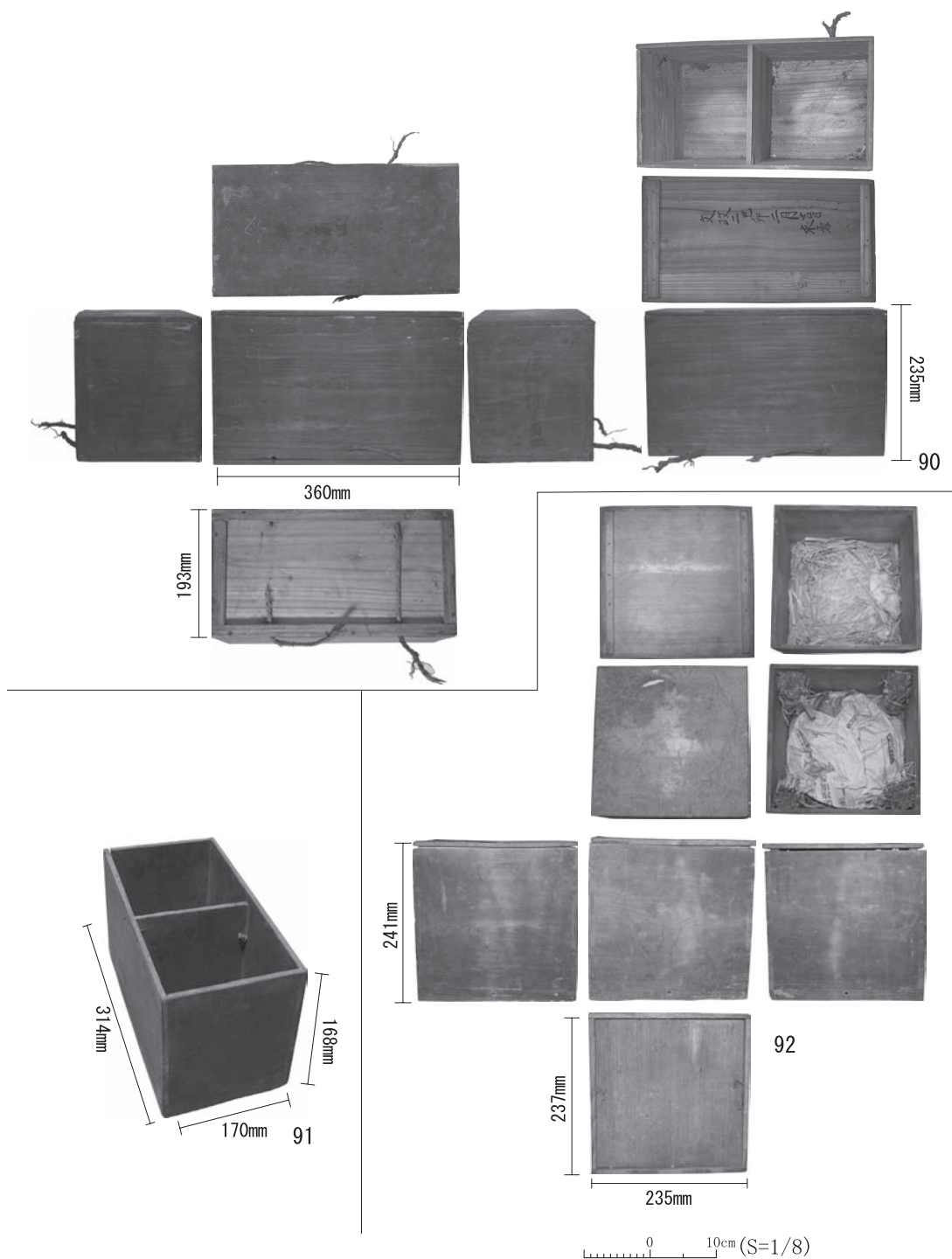
第11図 柴田藤兵衛家 収蔵陶磁器(甕)



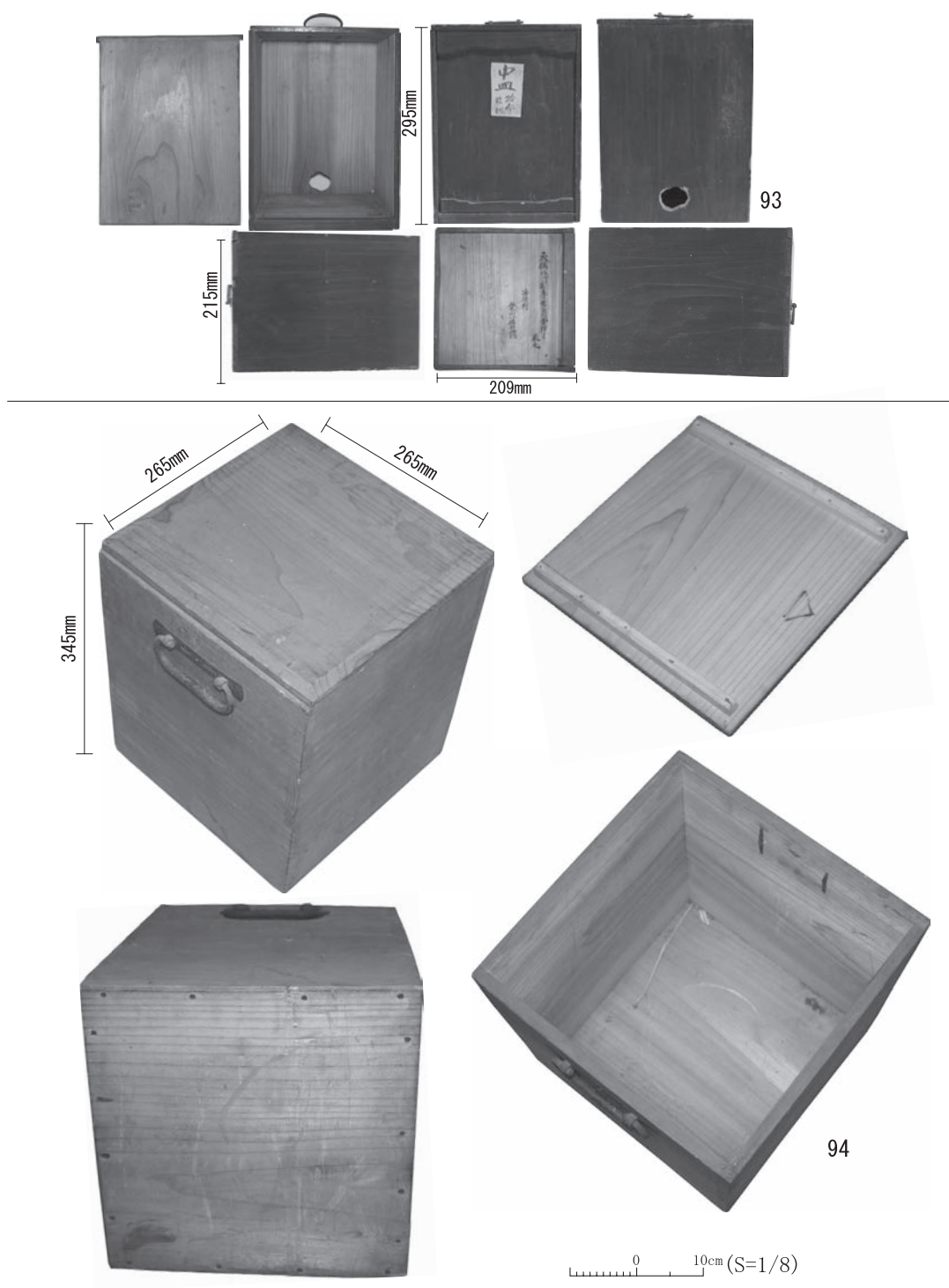
第12図 柴田藤兵衛家蔵内資料(箱1)



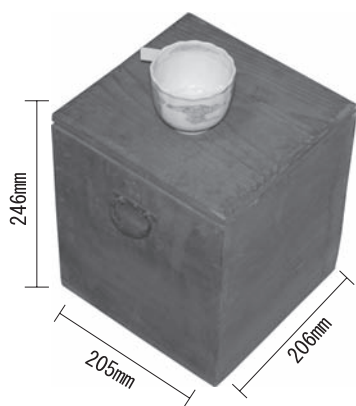
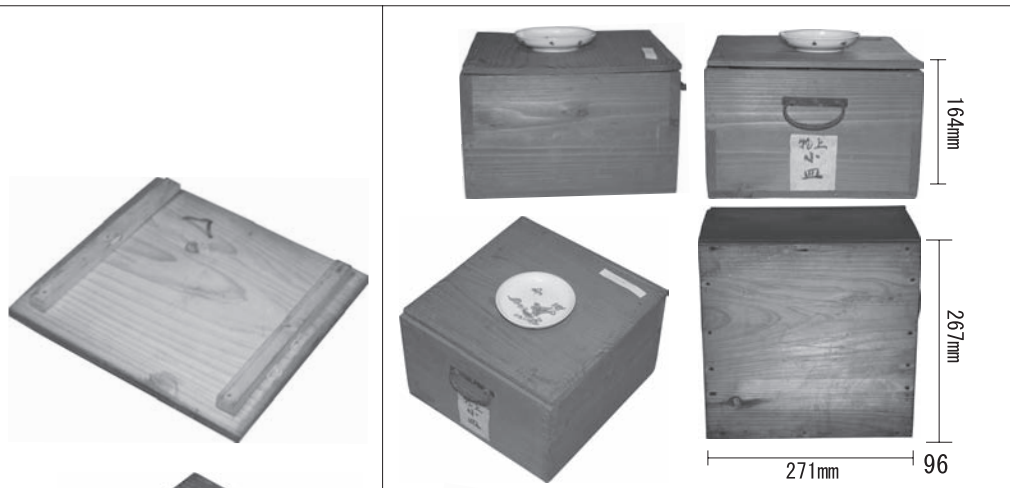
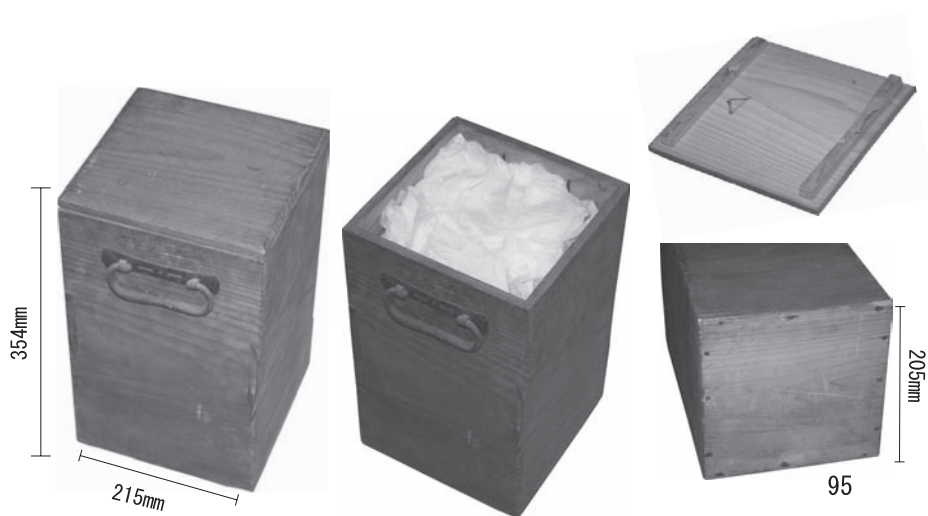
第13図 柴田藤兵衛家蔵内資料(箱2)



第14図 柴田藤兵衛家蔵内資料(箱3)

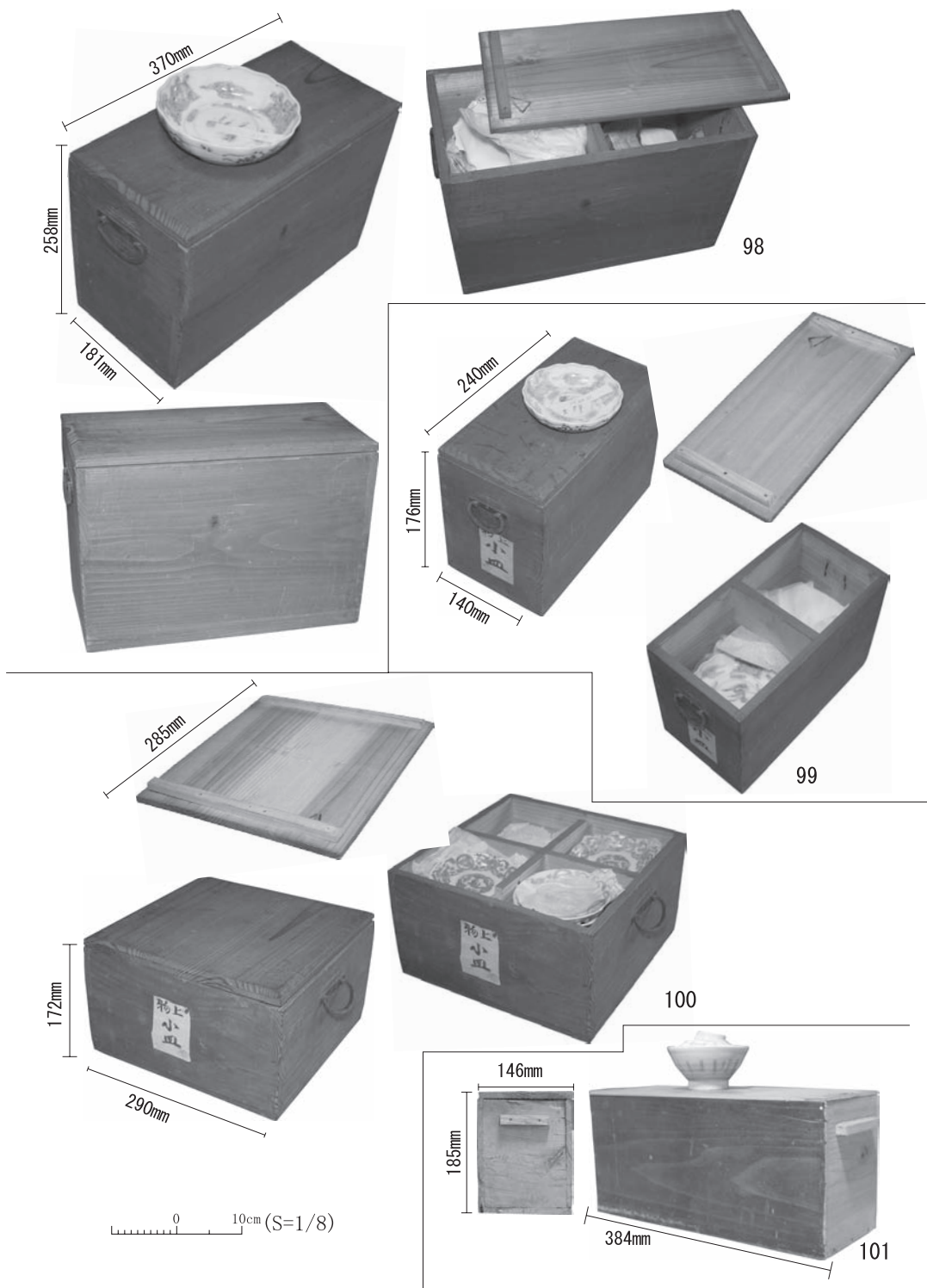


第15図 柴田藤兵衛家蔵内資料(箱4)

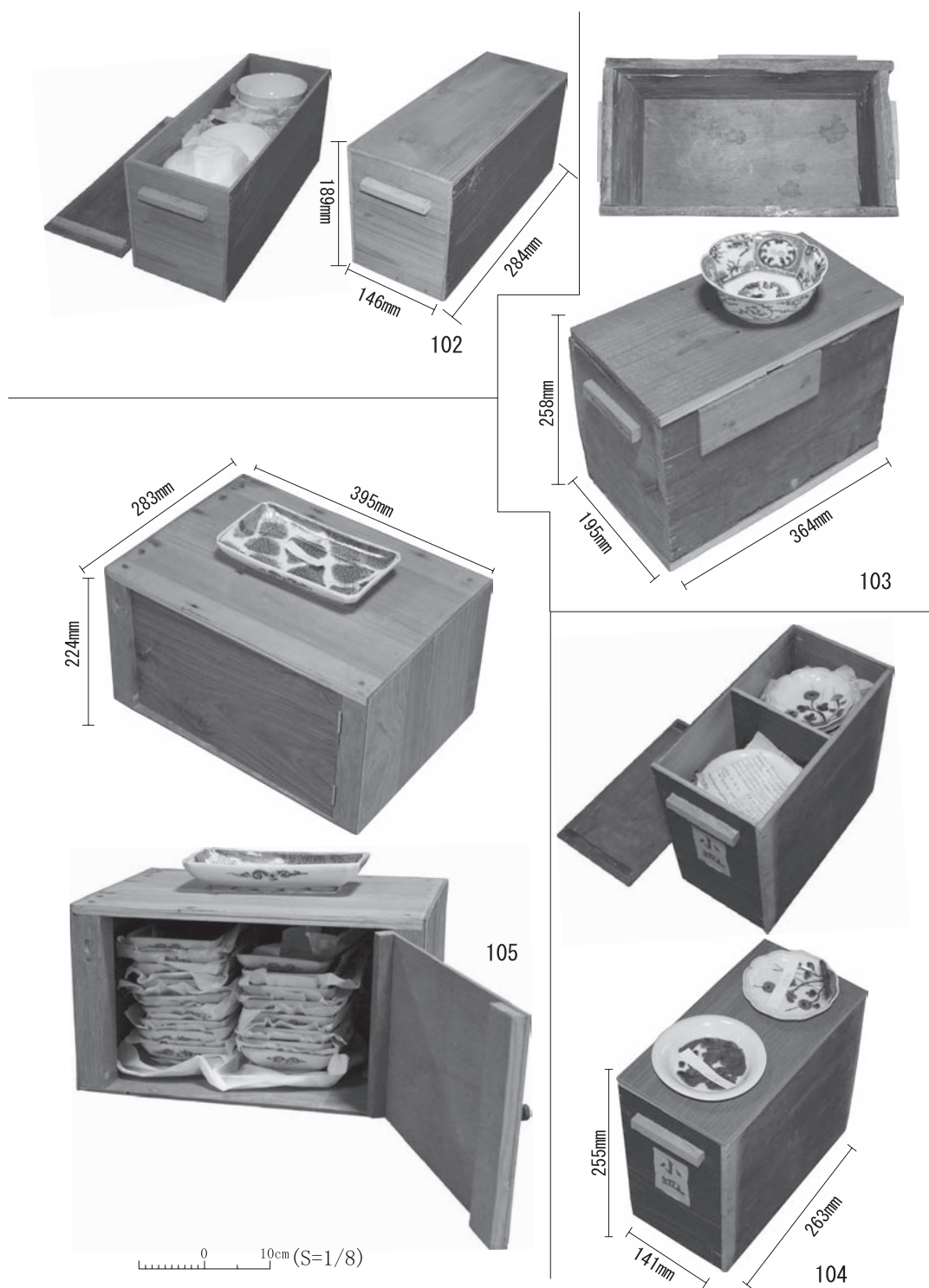


0 10cm (S=1/8)

第16図 柴田藤兵衛家蔵内資料(箱 5)



第17図 柴田藤兵衛家蔵内資料(箱 6)



第18図 柴田藤兵衛家蔵内資料(箱7)